

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第83集

あ さ ひ
朝 日 遺 跡 VI

—新資料館地点の調査—

本文

2000

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

国道22号線を名古屋から岐阜に向かう途中、ちょうど東名阪高速道路と交差する地点にあたる、西春日井郡清洲町を中心とする一帯には、弥生時代、東海地方でも屈指の大集落が広がっていました。2000年後の現在、当時の面影をみることはできませんが、近年の発掘調査によって、かつての「弥生の村」の概念をくつがえす巨大な「弥生の都市」の姿がしだいに明らかになりつつあります。今回の朝日遺跡の調査は、新資料館の建設に先立って行われたもので、国指定史跡であります、貝殻山貝塚の南で行われました。その結果弥生時代前期の環濠や、貝層、中期の区画溝や23体の埋葬人骨、後期の方形周溝墓やそこに供えられた、当時の宝石箱というべき合子型土器が見つかっております。本報告書では、このような膨大な遺構や遺物を、できる限りわかりやすく示したつもりですが、不十分な点や、取り上げることができなかつた問題もいくつかあります。今後、これらの遺物やデータが貴重な財産としてさらに活用され、県民の皆様をはじめ、全国の弥生時代研究の一助になることを切に願うものであります。

最後に、調査を行うにあたりご理解をいただき、ご指導・ご協力をいただいた愛知県教育委員会、清洲町教育委員会、および地元住民の方々、その他ご協力を賜った多くの皆様方に対し、心より謝意を申し上げます。

平成12年8月

財団法人愛知県教育サービスセンター
理事長 久留宮泰啓

例 言

1. 朝日遺跡は、愛知県西春日井郡清洲町・春日町・新川町・名古屋市西区の1市3町にまたがって、東西約1.4km、南北約0.8kmの範囲を有する大遺跡である。
2. 本書は、平成7年10月から平成8年12月にわたって実施した、愛知県清洲貝殻山貝塚新資料館建設の事前調査（調査面積5547㎡）に伴う発掘調査報告書である。
3. 調査担当は下記のとおりである。
平成7年度 福岡晃彦・宮腰健司・鈴木正貴
平成8年度 増澤徹・宮腰健司・秋田幸純・原田幹
4. 調査にあたっては、本センターの理事および各専門委員、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、清洲町教育委員会ほか関係諸機関のご協力を得た。
5. 実測図・拓本は原則として1/4・2/3・1/3の縮率とし、それ以外のものについてはそのつど明記した。欠損部については、想定できる部分に補助線をいれた。補助線が引けないものについては、欠損部にスクリーントーンで表示した。また、接合面が確認できるものについても、断面に補助線をいれることとした。
6. 本文では、『朝日遺跡Ⅴ』（1994愛知県埋蔵文化財センター）の時期区分にのっとり、Ⅰ期→弥生時代前期、Ⅱ・Ⅲ期→中期前葉（朝日式期を含む）、Ⅳ・Ⅴ期→中期中葉（貝田町式期）、Ⅵ期→中期後葉（高蔵式期）、Ⅶ・Ⅷ期→中期末～後期（山中式期を含む）、Ⅸ期→末～古墳時代初頭（廻間式期）、Ⅹ期→古墳時代中期（松河戸式期・宇田式期）で報告している。
7. 発掘調査および本書を作成するにあたり次の方々のご協力があった。（敬称略）
池田次郎、石川日出志、石黒直隆、泉拓良、伊藤秋男、伊藤淳史、伊藤正人、片岡宏二、加納俊介、久保和士、久保禎子、工楽善通、甲元眞之、佐藤由紀男、鈴木敏則、多賀谷昭、田崎博之、田村陽一、都築暢也、永草康次、中村友博、新美倫子、西本豊弘、柁宜田佳男、野口哲也、早瀬賢、原田幹、廣瀬時習、深澤芳樹、宮崎泰史、森勇一、山崎純男、山田博之、吉田広、渡辺正気、渡邊誠、藁科哲男
8. 本書の執筆者は目次に示した。なお、編集は宮腰健司が行った。
9. 発掘調査については発掘調査補助員である山内富正、整理全般については調査研究補助員である河合明美・鈴木由紀・田口雄一の他、多数の発掘作業員・整理作業員・整理補助員の皆様の協力を得た。記して感謝したい。
10. 調査区の座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。
11. 出土遺物及び調査記録は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目 次

本 文

序

例 言

I. 調査概要 (宮腰健司)	1
II. 遺構 (宮腰健司)	
1 基本層序	6
2 I期	6
3 II・III期	13
4 IV・V期	16
5 VI期	20
6 VII・VIII期	23
7 古墳時代	34
8 中世以降	35
9 埋葬人骨	35
III. 遺物	
(1) 土器	
1 縄文土器 (野口哲也)	49
2 I期 (永井宏幸)	52
3 II・III期 (永井宏幸)	92
4 IV・V期 (永井宏幸・宮腰健司)	140
5 VI期 (宮腰健司)	207
6 VII・VIII期 (宮腰健司)	255
7 IX期 (宮腰健司)	290
8 X期 (宮腰健司)	290
9 内傾口縁土器・厚口鉢 (永井宏幸)	293
10 沈線紋系土器 (永井宏幸)	293
11 IV・V期の遺物 (石黒立人)	297
12 その他の土製品 (宮腰健司)	302
13 中世以降の遺物 (鈴木正貴)	320
(2) 石器 (石黒立人)	
1 概要	323
2 器種	323
(3) 木製品 (宮腰健司)	394
(4) 玉類 (宮腰健司)	394
(5) 骨角器 (宮腰健司)	398
IV. 自然科学的分析・考察	
朝日遺跡貝層ブロック・サンプリングの調査報告 (渡辺誠 田中禎子)	413
朝日遺跡から出土したイノシシ属の骨のDNA分析 (石黒直隆)	431
朝日遺跡出土の動物遺体 (新美倫子)	438
朝日遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析 (藁科哲男)	458
朝日遺跡出土のヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、玉材の産地分析 (藁科哲男)	469
朝日遺跡の古環境解析 (鬼頭剛 尾崎和美)	503
愛知県朝日遺跡 (中世) より産出した昆虫化石群集 (森勇一)	515
朝日遺跡の自然遺物 (堀木真美子)	525
朝日遺跡 I～III期土器の胎土分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	528

朝日遺跡Ⅵ期土器の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）	535
朝日遺跡95年度調査区出土Ⅵ期土器の胎土分析とその考古学的評価（永草康次 藤山誠一）	540
朝日遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定および顔料分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）	553
朝日遺跡出土の人骨について（多賀谷昭 山田博之）	557

V. 考古学的分析・考察

弥生時代前期「遠賀川系土器」をめぐる諸問題 ～朝日遺跡Ⅰ期をめぐる～（永井宏幸）	577
朝日遺跡の青銅器生産 —青銅器生産の東方展開に占める位置—（吉田広）	597
朝日遺跡出土のサヌカイトと畿内式打製尖頭器についての覚え書き（榎垣田佳男）	610
磨製石斧生産をめぐる覚書2000（石黒立人）	620
朝日遺跡出土石器の使用痕分析（原田幹）	630
朝日遺跡検討会の記録 —95・96調査区の成果を中心に— 石川日出志 佐藤由紀男 田崎博之 深澤芳樹 野口哲也 原田幹 早瀬賢 石黒立人 宮腰健司 樋上昇 永井宏幸	639

V. まとめに変えて（宮腰健司）	662
報告書抄録	671

図 版

写真図版	1
遺構図版	84
遺物一覧表	99
遺構一覧表	164

I 調査概要

1. 調査に至る経緯

朝日遺跡は、西春日井郡清洲町を中心に春日町、新川町、名古屋市西区に南北約1.4km、東西約800mにわたって広がる東海地方屈指の弥生時代の集落遺跡である。これまで昭和44年から平成元年にかけて愛知県教育委員会、財団法人愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部、財団法人愛知県埋蔵文化財センターによって約90,000㎡が発掘調査され、多くの成果を得ている。

今回の発掘調査は愛知県貝殻山貝塚新資料館建設に伴うもので、愛知県教育委員会の委託事業として実施された。調査区は、遺跡の規模が最大となる弥生時代中期から後期の中心部の南西に位置し、国指定史跡貝殻山貝塚の南に隣接する地点である。調査面積は、平成7年度（95調査区）2773㎡、平成8年度（96調査区）2774㎡の調査を行った。

2. 遺跡の立地

朝日遺跡が立地する尾張平野は、東西約40km、南北約70kmに及び、平野の北辺から西辺を木曾川が流れ、伊勢湾に注いでいる。遺跡の西側にある五条川も、木曾川と同様に北東から南西にかけて流れて、一宮市東部で青木川が合流しており、さらに西側を走る三宅川・日光川と並んで、かつての旧木曾川の本流や分流と見られる主要河川であったと考えられる。遺跡はこの旧五条川の自然堤防上に立地すると考えられていたが、近年海岸線の移動に伴う東西に延びる浜堤列のひとつに立地するという見解が有力であり、浜堤の高まりと尾張平野を流れる河川の開析・埋積によって遺跡の地理環境が描出されたと考えられる。

遺跡は東西約1.1km、南北約0.8kmの浜堤に広がっており、その微高地を北東から南西に走る谷Aと分

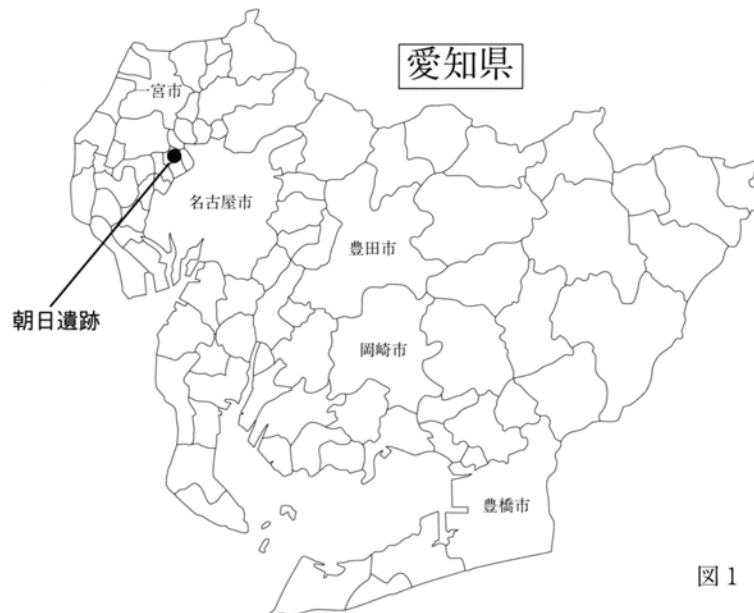
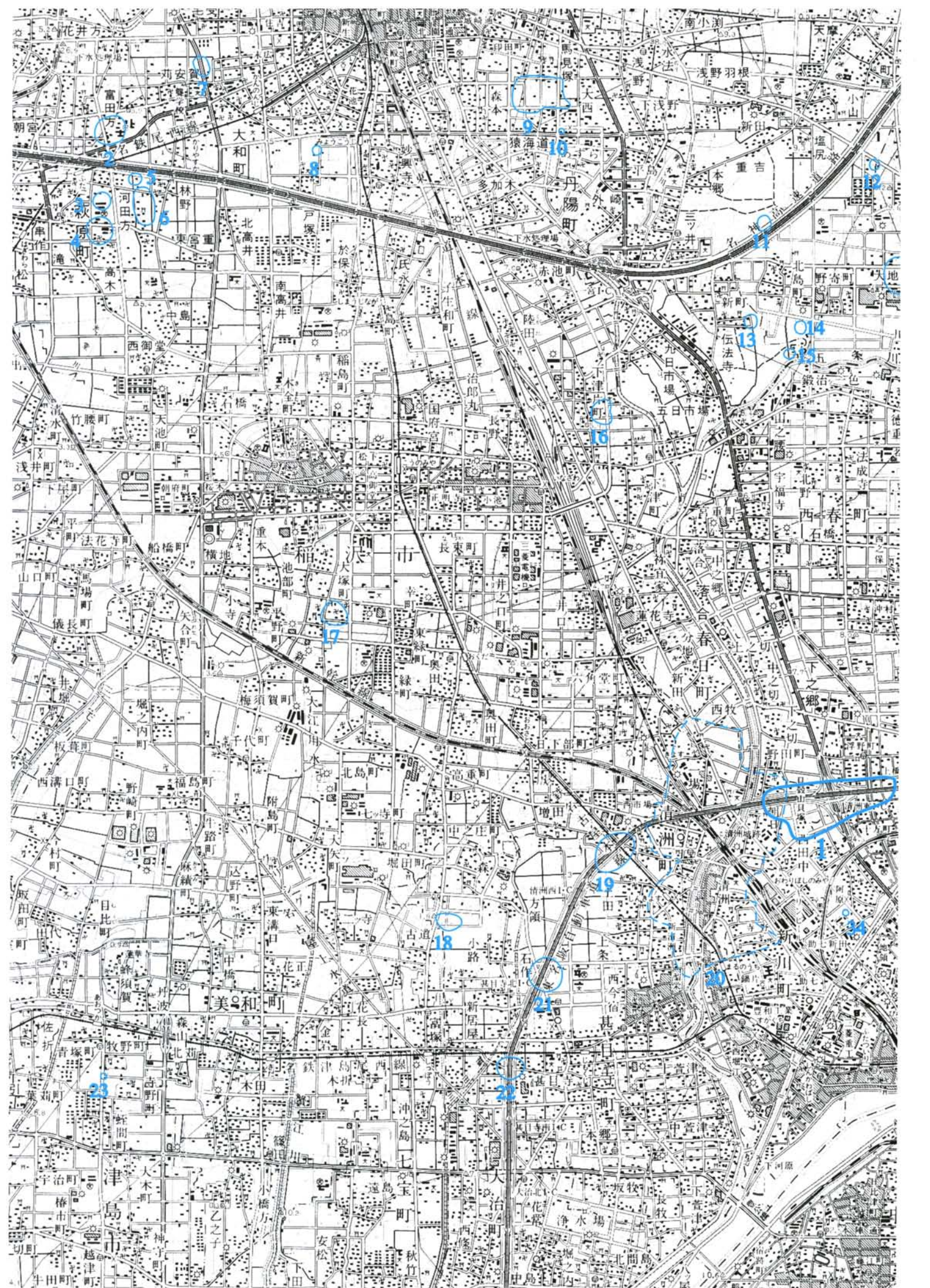


図1 遺跡の位置



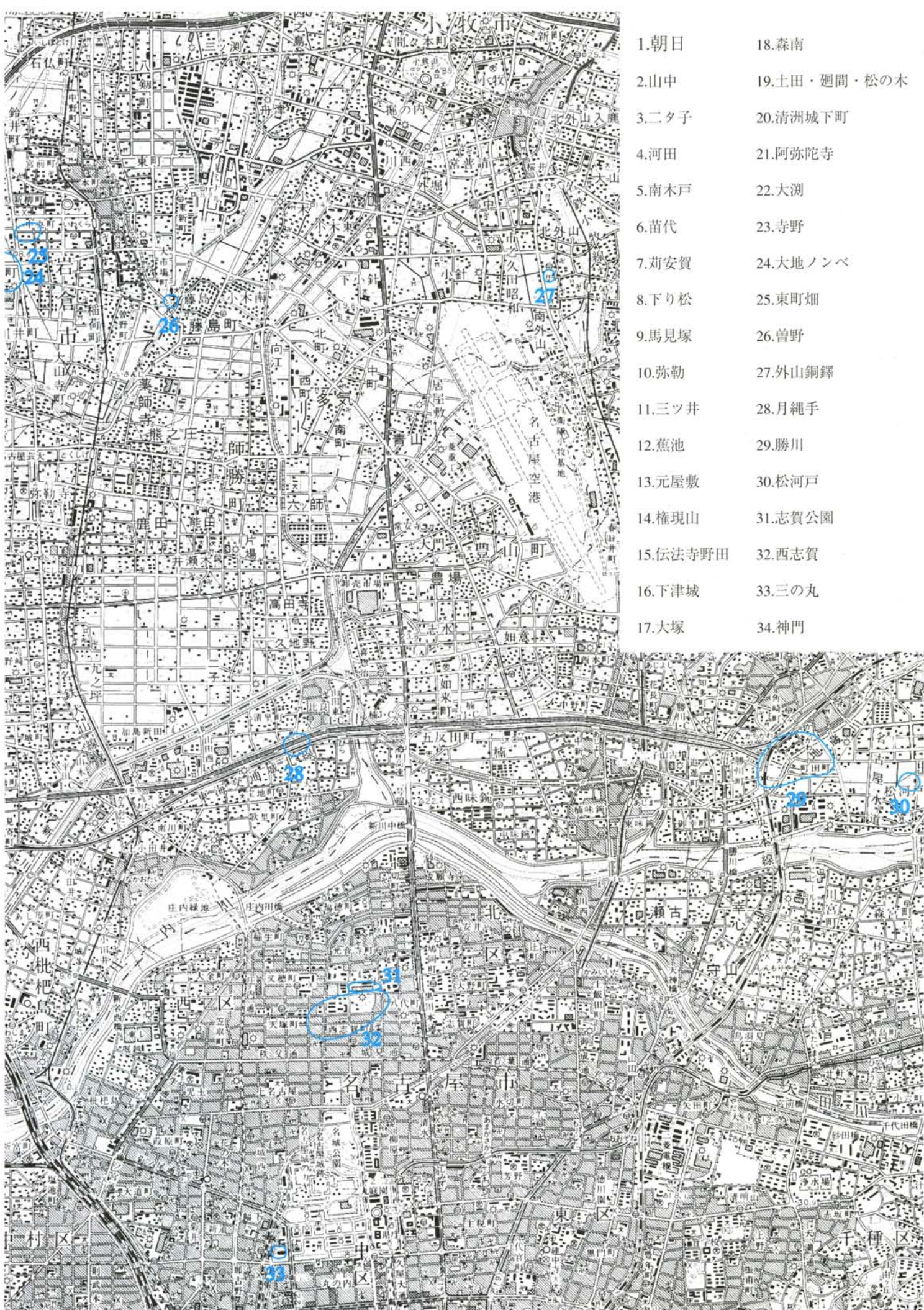


図2 朝日遺跡と周辺の遺跡位置 (1/50000)



図3 調査区の位置 (1/1500)

岐して直交するように南東に流れる谷Bによって大きく3区分できる。谷Aは縄紋時代中期には開析されたもので、幅25～30m、深さ4mに及び、水流のある時期とない時期がある。谷Bは幅20～25m、深さ2～3mを測り、縄紋時代の堆積はみられない。弥生時代中期中葉以前は浅い谷状の地形をなしており、後葉以降に現状の谷地形になったと考えられる。遺跡は標高2～3mが検出面となり、溝や谷などは0m以下にまで達する。

調査区は微高地の南西縁部に当たり、南部・西部が後背湿地でゆるやかに低くなる地形を復元することができる。

3. 歴史的環境

周辺5km以内にある弥生時代の遺跡としては、西2kmにある清洲町松の木遺跡(Ⅱ～Ⅴ期)、南西3.5kmにある甚目寺町阿弥陀寺遺跡(Ⅱ～Ⅷ期)とその南に近接する甚目寺町大測遺跡(Ⅵ期)、西南西4.5kmに甚目寺町森南遺跡(Ⅳ～Ⅷ期)がある。この範囲内の拠点的な遺跡としては阿弥陀寺遺跡があげられるが、Ⅰ期には成立しておらず、貝層や方形周溝墓群もみられないことから、朝日遺跡との格差は大きいと思われる。

近隣で朝日遺跡と同規模の遺跡といえるものは、庄内川を挟んだ対岸にある名古屋市北区西志賀遺跡

で、直線距離にして約5km南東に位置する。まだ全容は不明な一宮市八王子遺跡であるが、周辺の遺跡を含め、遺跡群として弥生時代全期にわたって継続していた可能性がある。

区期になると周辺には、西清洲町廻間遺跡や清洲町土田遺跡、東に名古屋市西区貴生町遺跡など新たな遺跡が増加する。また朝日遺跡もその中心を東に移していくようで、南約1kmには人面線刻土器が出土した新川町神門遺跡があり、遺跡の分散化が伺える。

4. 調査の概要

調査は1995年の10月から1996年の12月にかけて行われた。調査開始時点では昭和46年の貝殻山周辺の調査に基づき、弥生時代前期の集落・貝塚が想定されたが、遺跡全体の南西の縁辺部にあたりことから、前期以外の遺構・遺物の出土は多くないものとして調査に着手した。

調査はまず西側の95調査区から始め、中世の灰色シルト＝第1面、古墳時代の灰白色シルト・砂＝第2面を除去し、当該期の遺構の検出を行った。

次に第3面として、古墳時代面より認識できた、弥生時代後期の方形周溝墓群の調査を行った。

この時点で、当初予想していたより遺物包含層が厚く、遺物量も多いことが判明したため、調査期間と人員を調整するため、包含層である黒色砂内での検出は大型のものに限定することとした。検出レベルは、貝層上面など比較的峻別しやすいものを基準にして任意の高さに設定し、トレンチで確認しつつ遺構掘削を行った＝第4面。そのため遺物の所属・遺構の認識について以下の問題点が生じた。

まず、上位からの掘り込みは、比較的容易に確認できる大型のものについては除去できたが、中・小

型ものについては考慮せずに掘削しているため、遺構として取り上げたもの、特に上・中層部分については、別遺構のものが混在している可能性がある。

さらに、95調査区の北半と96調査区の北西部分については、最終的にはVI期＝高蔵期の生活面があることがわかったが、調査中には未区分のまま、検出として取り上げている。そのため、生活面のある一帯の高蔵期以前の遺構の上端については、誤認である可能性が高い。その他、弥生時代の包含層が黒色砂層であるため、堆積層の広がりを見事に区分しつつ調査することは、中世・古墳時代の層を除きできず、包含層＝検出として取り扱った。95調査区では、中世・古墳時代を検出I、弥生時代遺物包含層のうち、第3面の後期方形周溝墓検出までを検出II、それ以下地山までを検出IIIとした。

また、埋葬人骨もこの時点で確認している。

第4面とした弥生時代の大型遺構の検出をほぼ終えた時点で、湧水期に入り、水位が上昇したこと、田圃に導水があり、調査区や遺構の多くの部分で崩壊があり、セクションによる層序の確認が不可能な状態になった。これは第5面の地山である黄灰色砂面でも同様で、遺構検出・維持に極めて困難な状況に陥ったため、SD102とSD103を境に北・中・南に小区分し、順次調査を進めていった。

この湧水状況は96調査区の古墳時代面まで続き、調査に支障を伴った。調査は96調査区も、95調査区同様の方針で掘削を行った。ただ、包含層の検出については、中世・古墳時代面まで＝検出I・II、第3面までを検出III、後期方形周溝墓マウンド高まり部分を検出IV、それ以下を任意に上下2層に区分して、それぞれ検出V・検出VIとした。

最終遺物数は、コンテナ箱で約3100箱となった。



写真1 95調査区湧水状況



写真2 95調査区第5面検出状況

Ⅱ 遺 構

1. 基本層序

基本的な層序は、灰色粘土—中世、灰白色シルト—古墳時代中期～後期、黒色砂—弥生時代、黄灰色砂—地山となる。

中世の灰色粘土は、ほぼ平行堆積をなすが、部分的に下層の高低差に影響されている。

古墳時代中期以降に堆積した灰白色シルトは、95調査区北東部においては砂質、95・96調査区南部では粘土質を呈する。堆積状況は下層の弥生時代の地形、特に後期の方形周溝墓群に、大きく影響を受ける。灰白色シルトと弥生時代の黒色砂の間には、ケヤキやスギなどの流木を多く含む、黒色または黒褐色の砂・シルト・粘土層があり、層序からみると弥生時代後期以降、おそらくは古墳時代中期～後期の堆積と考えられる。

弥生時代の堆積層である黒色砂は、遺構の変遷などからみて、大きく3区分できると考えられるが、

2. I 期

(1) 溝

A. S D 101

調査区の北辺に沿って、わずかに弧を描きながら走る溝で、幅2.5～4.5m、深さ0.6～1.4mを測る。底面レベルは、中央部で0.9～1.2m、北西コーナーが1.6m、北東コーナーが1.3mで、中心部に比べコーナー部分が高い傾向がみられる。またコーナー部分の弧の外縁は、底面より急に立ち上がった後、上部はゆるやかな傾斜となる。

今調査では明瞭に分層できなかつた。特にⅥ期の生活面と考えられる焼土・炭化物を伴う層が黒色砂中に存在したが面的に広げて確認することはできなかつた。また、このⅥ期面としたレベルと丁度同じレベルには、鉄分の沈着が数センチの厚さで随所に見られたが、地下水位の変動によるものとも考えられるので、直接的な関連は不明である。さらに、最下層にある黄灰色砂に黒色砂ブロックが混入する層については、その上面が遺構面となる可能性が高い。また、95調査区の北西と96調査区の南東では、黒色砂にあたる層が非常に土色が薄く、黒褐色または茶褐色を呈した粗い砂になり、遺物の包含も極めて少なくなる部分があった。唯一比較的容易に区別することができたものとしては、地山土である黄灰色砂のブロックが混入する後期及びⅥ期の方形周溝墓のマウンドがあげられる。

埋土の状況は、下位には黄灰色砂と黒色砂の互層状の堆積と上からの土砂の流入や側壁の崩落に伴う不規則な堆積がみられ、中位以上ではほぼ平行堆積となっている。この不連続面については溝の再掘削または再利用が行われた結果であると考えられる。この中位から上位部分には貝の廃棄があるが、溝全面には無く、北西コーナー部分と96調査区の10m部分にみられた。また貝の形をとどめてはいないが、95調査区の11g部分と96調査区の9p・9q部分では、砂粒の極めて粗い橙褐色砂が貝廃棄と同じレベルに



図1 96調査区南北セクション (1/80)



図2 96調査区北壁セクション (1/80)

灰色シルト
 灰白色シルト・砂・粘土
 貝層・混貝土層
 貝層・混貝土層

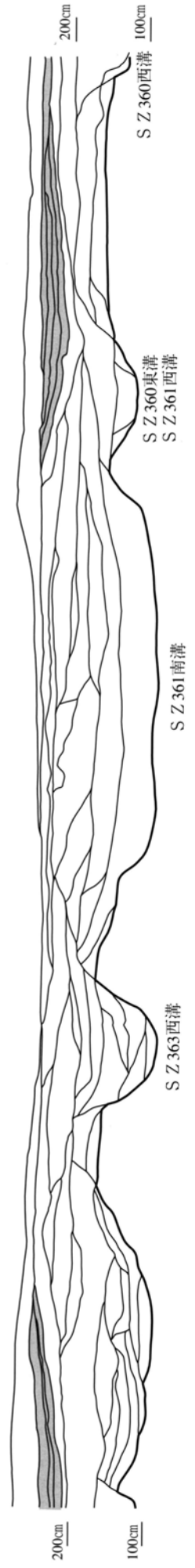
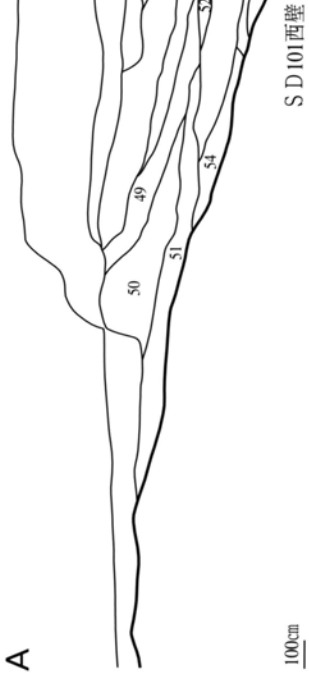


図3 96調査区壁セクション (1/80)

灰色シルト
 灰白色シルト・砂・粘土
 貝層・混貝土層
 貝層・混貝土層

300cm

B

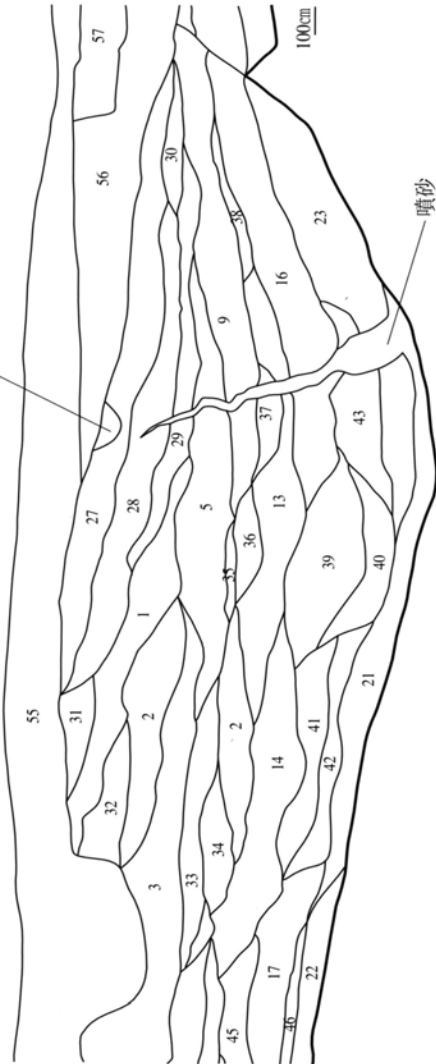


SD101西壁

100cm

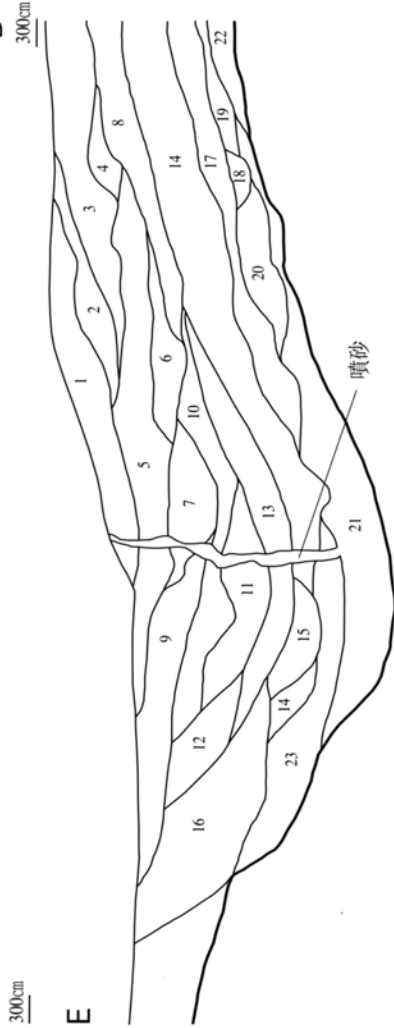
貝が集中する

C



SD101北壁

D



SD101南壁

100cm

- | | | |
|----|---------------------------------------|----|
| 1 | 純貝層 (カキ多い・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 2 | 純貝層 (カキ多い・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 3 | 貝層 (ハマグリ多い) + 灰褐色 (やや褐色強い) | 砂多 |
| 4 | 純貝層 (カキ主体・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 5 | 破砕貝層 (シジミ主体・ハマグリ・カキ) | 砂多 |
| 6 | 純貝層 (カキ主体・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 7 | 純貝層 (カキ主体・ハマグリ・シジミ) + 灰褐色 | 砂多 |
| 8 | 純貝層 (カキ・ハマグリ・シジミ) + 灰褐色 (強い) | 砂多 |
| 9 | 灰褐色砂 + 貝 (カキ主体・ハマグリ・シジミ) わ | 砂多 |
| 10 | に含む | 砂多 |
| 11 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 12 | 黒色砂 | 砂多 |
| 13 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) 多い | 砂多 |
| 14 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) やや多い | 砂多 |
| 15 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) わずかに | 砂多 |
| 16 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) 極わずかに | 砂多 |
| 17 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) わずかに | 砂多 |
| 18 | 黒色砂 + 貝 (カキ・ハマグリ・シジミ) 含む + 黄 | 砂多 |
| 19 | 砂 + 黄褐色砂 + 黄褐色砂 + 黄褐色砂 + 黄褐色砂 (1~2cm) | 砂多 |
| 20 | 黒色砂 + 黄褐色砂 + 黄褐色砂 (2~3cm) | 砂多 |
| 21 | 黄褐色砂 + 黒色砂 | 砂多 |
| 22 | 暗黄褐色砂 + 黒色砂 | 砂多 |
| 23 | 黒色砂 + 黄褐色砂 + 黄褐色砂 (1~2cm) をわずかに | 砂多 |
| 24 | に含む | 砂多 |
| 27 | 黒色砂 + わずかに 鉄砂 貝を含む | 砂多 |
| 28 | 暗茶褐色砂 (やや粘質) | 砂多 |

- | | | |
|----|-----------------------------|----|
| 29 | 暗茶褐色砂 (やや粘質) + 黄褐色砂 | 砂多 |
| 30 | 灰分が沈着する | 砂多 |
| 31 | 純貝層 (カキ多い・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 32 | 純貝層 (カキ多い・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 33 | 貝層 (ハマグリ多い) + 灰褐色 (やや褐色強い) | 砂多 |
| 34 | 貝層 (ハマグリ多い) + 灰褐色 (やや褐色強い) | 砂多 |
| 35 | 破砕貝層 (シジミ主体・ハマグリ・カキ) | 砂多 |
| 36 | 破砕貝層 (シジミ主体・ハマグリ・カキ) | 砂多 |
| 37 | 灰褐色砂 + 貝 | 砂多 |
| 38 | 灰褐色砂 | 砂多 |
| 39 | 黒色砂 (やや粘質) + 貝 | 砂多 |
| 40 | 黒色砂 (やや粘質) + 貝 + わずかに 黄褐色砂 | 砂多 |
| 41 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 | 砂多 |
| 42 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 + 黄褐色砂 | 砂多 |
| 43 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 | 砂多 |
| 44 | 黒色砂 + 貝 | 砂多 |
| 45 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 + 黄褐色砂 | 砂多 |
| 46 | 暗黄褐色砂 | 砂多 |
| 47 | 黒色砂 + わずかに 貝 | 砂多 |
| 48 | 黒色砂 (やや灰色) + わずかに 貝 | 砂多 |
| 49 | 黒色砂 + 貝 | 砂多 |
| 50 | 黒色砂 + 貝 + 黄褐色砂 + プロック (1cm) | 砂多 |
| 51 | 黒色砂 (やや灰色) + 貝 + 黄褐色砂 + 互層 | 砂多 |
| 52 | 黒色砂 | 砂多 |
| 53 | 黒色砂 + 暗黄褐色砂 + プロック + 互層 | 砂多 |
| 54 | 黄褐色砂 + 黄褐色砂 + 互層 | 砂多 |
| 55 | 表土 | 砂多 |
| 56 | 灰褐色粘土 | 砂多 |
| 57 | 灰褐色粘土 + 灰白色 + 黒色砂 + 粗砂 | 砂多 |

- | | | |
|----|-----------------------------|----|
| 29 | 暗茶褐色砂 (やや粘質) + 黄褐色砂 | 砂多 |
| 30 | 灰分が沈着する | 砂多 |
| 31 | 純貝層 (カキ多い・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 32 | 純貝層 (カキ多い・ハマグリ・シジミ) | 砂多 |
| 33 | 貝層 (ハマグリ多い) + 灰褐色 (やや褐色強い) | 砂多 |
| 34 | 貝層 (ハマグリ多い) + 灰褐色 (やや褐色強い) | 砂多 |
| 35 | 破砕貝層 (シジミ主体・ハマグリ・カキ) | 砂多 |
| 36 | 破砕貝層 (シジミ主体・ハマグリ・カキ) | 砂多 |
| 37 | 灰褐色砂 + 貝 | 砂多 |
| 38 | 灰褐色砂 | 砂多 |
| 39 | 黒色砂 (やや粘質) + 貝 | 砂多 |
| 40 | 黒色砂 (やや粘質) + 貝 + わずかに 黄褐色砂 | 砂多 |
| 41 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 | 砂多 |
| 42 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 + 黄褐色砂 | 砂多 |
| 43 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 | 砂多 |
| 44 | 黒色砂 + 貝 | 砂多 |
| 45 | 黒色砂 (やや粘質) + わずかに 貝 + 黄褐色砂 | 砂多 |
| 46 | 暗黄褐色砂 | 砂多 |
| 47 | 黒色砂 + わずかに 貝 | 砂多 |
| 48 | 黒色砂 (やや灰色) + わずかに 貝 | 砂多 |
| 49 | 黒色砂 + 貝 | 砂多 |
| 50 | 黒色砂 + 貝 + 黄褐色砂 + プロック (1cm) | 砂多 |
| 51 | 黒色砂 (やや灰色) + 貝 + 黄褐色砂 + 互層 | 砂多 |
| 52 | 黒色砂 | 砂多 |
| 53 | 黒色砂 + 暗黄褐色砂 + プロック + 互層 | 砂多 |
| 54 | 黄褐色砂 + 黄褐色砂 + 互層 | 砂多 |
| 55 | 表土 | 砂多 |
| 56 | 灰褐色粘土 | 砂多 |
| 57 | 灰褐色粘土 + 灰白色 + 黒色砂 + 粗砂 | 砂多 |

図4 SD101北壁・西壁・南壁セクション (1/40)

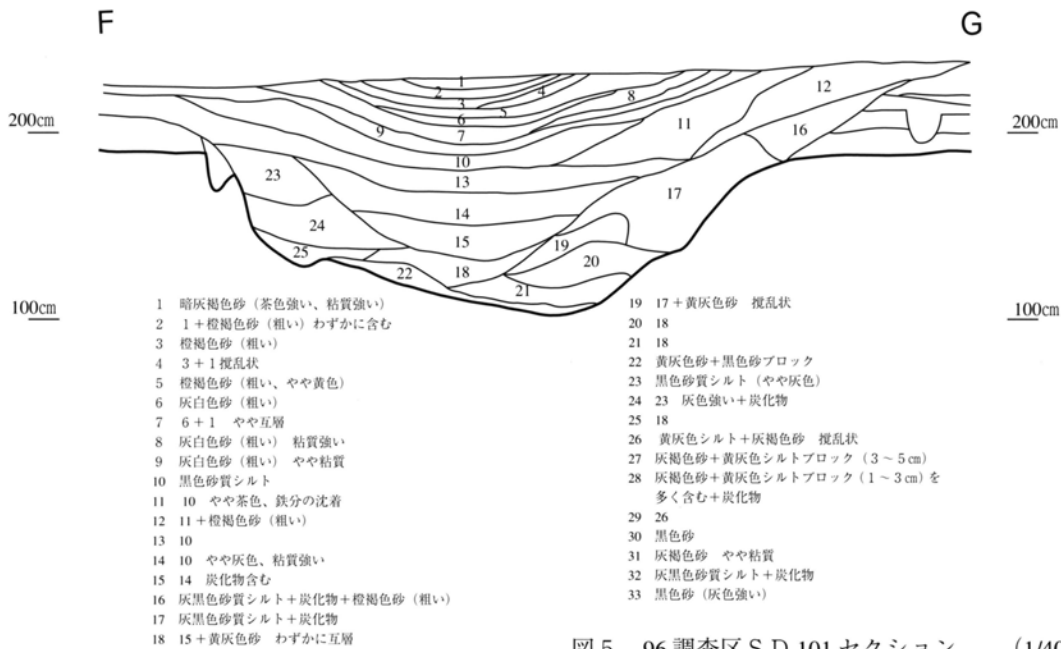


図5 96調査区SD 101セクション (1/40)

あり、貝層である考えられた。これらの廃棄は南側、つまりSD 101を環濠とするならば、外側からの流入がめだっている。貝の種類はカキが主体であるが、95調査区の北西コーナー部分の廃棄にはハマグリ・シジミの多い層もみられた。

96調査区の北東コーナーには、溝の方向に長軸を合わせるように、幅0.7m、長さ1.6mの範囲で、10~20cmほどの自然礫が、SX 04では30個ほど、SX 05では10個ほど検出されており、礫間には土器片や骨片も出土した。

遺物の取り上げは、95調査区では貝層下端を境に上位を上層1~3層、下位を下層4~6層に分け、96調査区では貝層を含む層を2層、その上位を1層、下位を3層として取り上げた。ただ、貝層や貝破棄と思われる橙褐色砂部分においては層位的な掘削が行えたが、前述したとおりそれらの層は全面には無く、貝層が存在しない部分については、貝層のみられる部分のレベルに合わせて掘削しており、出土層には上記の層名が付記されるが、層序による取

り上げとはなっていない。また、VI期生活面などの弥生時代に属する後世の掘削・攪乱についても、排除できていない。そのため5mグリッドと粗い区分であるが、溝全面にわたって、出土層と遺物についての関係を図6に示す。

B. SD 42・43

SD 42は、SD 101の南約10m程の場所を、同溝と平行して約27mにわたって延び、東側1/3では南北にも広がり、不定形な形態をしている。幅は2~2.5m、深さは0.4mを測る。95調査区の東壁沿いにはSD 43が、SD 42の北辺側に掘削され、これより東では溝幅が広がる。SD 43はSD 42とは別遺構と考えられたが、上層の埋土では連結しており、再掘削の可能性が高い。

C. SD 45

SD 101の東コーナー部分から、南南西に約7m程走る溝で、SD 101と同時期のものか、またはそれに先行する。幅は1.8~2m、深さは30~40cmを測る。遺物の出土量はやや少なめである。

表1 95調査区SD 101 グリッド・層位別出土遺物一覧

	11e	11f	11g	11h	11i	10j	11j	10k	11k	10l	11l
上層1	I~II	I~II	V	VI	VI		VI		VI	VI	
上層2		I~II	IV	VI	I~II	IV	VI	VI	VI	VI	I~II
上層3			I	VI	VI	IV	IV	I~II	VI	I	I~II
貝層		I~III	I								
下層4			I	I	I		VI	I	IV	I~II	I
下層5			I	I	I			I	I	I	I
下層6		I		I	I			I	I	I	I

D. S D 46

S D 42・43の南を走る、幅20cm、深さ30cmの細い溝になる。同様な溝は調査区の北部～中部にかけて10条程度みられ、これと直交する溝も同数程度検出できた。これらの溝からの遺物出土量は、S D 46でややまとまって出土しているほかは極めて少なく、時期同定は困難なものがある。ただ土層観察からみて、調査区内では最古の遺構群になると思われ、S D 101やS D 42・43の走る方向とも一致することから、この時期に属する可能性が高いと判断した。

(2) 土坑

A. S K 118

96調査区の西側の、S D 101とS D 42・43の間にある大型の土坑で、不定形な楕円を呈する。大きさは南側が欠損しているため不明であるが、長径約3m、短径2.6m、深さ0.5mを測る。

B. S K 123

S K 118と同様S D 101とS D 42・43の間にある大型の土坑で、95調査区の東側で検出された。形態

は不定形で、長径1.9m、短径1m、深さ0.3mを測る。

(3) 住居

A. S B 07

95調査区のS D 42・43よりさらに南で検出された竪穴住居で、北と南の堀肩がやや不明瞭になる。平面形態は隅丸方形または隅丸長方形を呈し、短径が3.9m、長径が4m以上、深さ10～20cmになる。床面は明瞭ではなかったが、北西側の底面直上にまとまった遺物の出土をみた。

B. S B 06・08・10・11

各々I期になる可能性ある竪穴住居である。S B 06は5～6mを測る円形のものであるが、後世の掘削が激しく明瞭な所属遺物を確認できなかったが、VI期に下る可能性は低いものと思われる。その他S B 08・10・11は方形または長方形を呈するが、確実な所属時期は不明である。

C. S A 01・S K 126

S A 01は95調査区の西壁側で、S D 101のコー

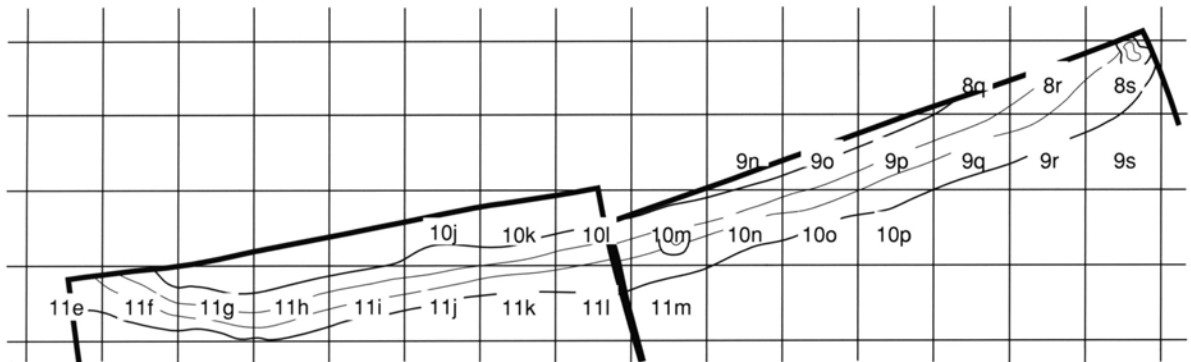


図6 S D 101グリッド配置

表2 96調査区S D 101 グリッド・層位別出土遺物一覧

	10m	11m	9n	10n	9o	10o	9p	10p	8q	9q	8r	9r	8s	9s
1層	I～II	VI	I	I～II	I～II	I～II	IV	I～II	I～II	V	II	I～II	VI	I～II
貝層	I～II													
2層	I～II	I～II	I～II	I～II		I～II	I～II	I～II	I～II	I～II	I～II	I～II	VI	
3層	I			I	I	I	I			I	I	I	VI	

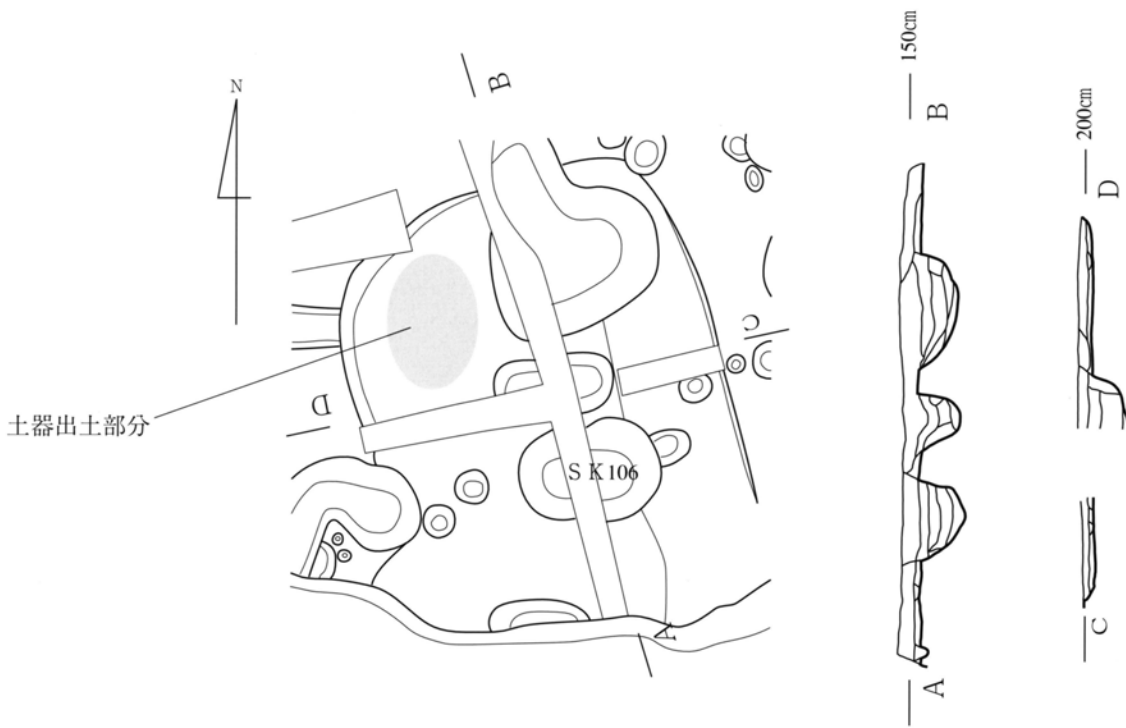


図7 SB 07 (1/80)

ナー部分の南側部分で検出された掘立柱建物で、西・南柱穴列は不明である。北側は2間(1.8m間隔)、東側は3間(北より1.2m—1.2m—1.8m)あり、20～30cmの円形で、深さは6～20cmを測る柱穴が並ぶ。北西コーナー部分には北辺と東辺に沿うように、幅20cm、深さ10cmの溝が走る。また、内部にあたる部分には50～70cm程の楕円形を呈する焼土の広がり3ヶ所ある。また西壁の土層にも同様の焼土

層の堆積が確認でき、西側にさらに続いていたと思われる。さらに北辺外には、S D 101 側に向かって開口するように広がり、埋土に焼土・炭化物を含む S K 126 がある。遺物からは所属時期は決定できなかったが、検出・堆積状況からみて最下位の遺構群に伴う可能性が高いと考えた。



図8 SA 01 (1/80)

3. II・III期

(1) 溝

A. S D 102

I期の溝S D 101の南側約15mをほぼ沿うように走る、幅3～3.5m、深さ0.7～1.2mの溝である。調査区で検出できただけでは、東端はまっすぐに北東に延びていくようであるが、西端は、極僅かであるが弧状をなし、やや北西側に延びていく。溝埋土は、最下層に水流があったの認識できる互層状の堆積が10～20cmほどあり、その上層は黒色砂によって、両肩側から埋まっている。96調査区の東端部分では中層(2層)中に、カキ主体の貝層が約40cmの厚さで堆積していた。遺物の取り上げは95調査区では中位を基準に、上層を1～4層、下層を4～8層に分け、96調査区では貝層部分を2層、その上位を1層、下位を3層としたが、分層の区分は任意である。96調査区東端3層より、大型壺(501)が破片の状態出土している。

B. S D 106

96調査区の東壁から南壁にかけて弧を描くように走る溝で、幅3～3.5m、深さ0.7～1.6mを測る。ほぼ南北に走る南壁付近部分では、東肩がややなだらかになり、調査区内だけで約13mにわたって貝の廃棄がみられた。廃棄は厚さ約40cmをなし、西壁側の最下層のみがカキ主体で、その他はハマグリ・シジミが多数を占めている。遺物の出土は、貝層がある部分の貝層下層とその直下部分に多くみられたが、貝層のない北東部分では極めて少量であった。遺物の取り上げは、貝層のある部分を2層とし、その上位を1層、下位を3層とした。また貝層については、南部西肩のセクションベルト内のカキ層がある部分については、1層貝層・2層貝層とし、中央から東肩の貝廃棄は「貝層」として取り上げた。

C. S D 105

調査時点ではS D 104として認識して掘削し、遺物の取り上げも行っていたが、遺物整理において、

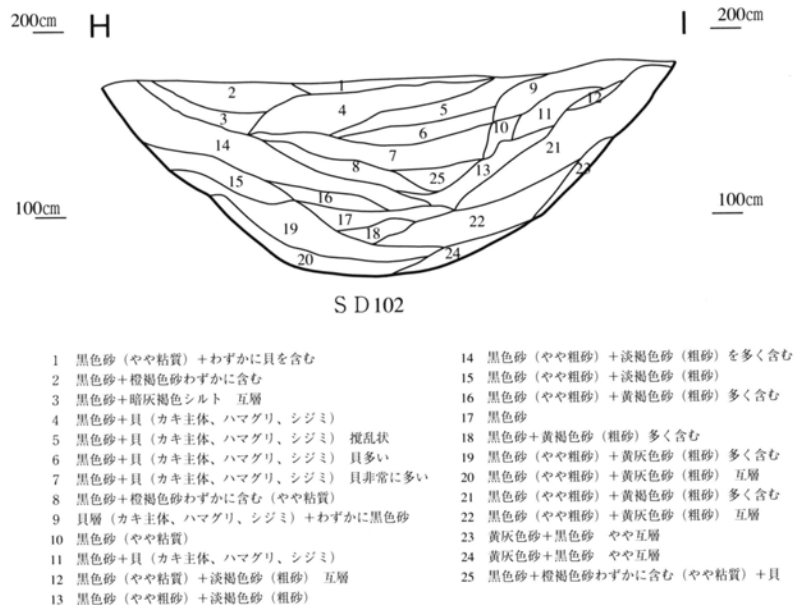
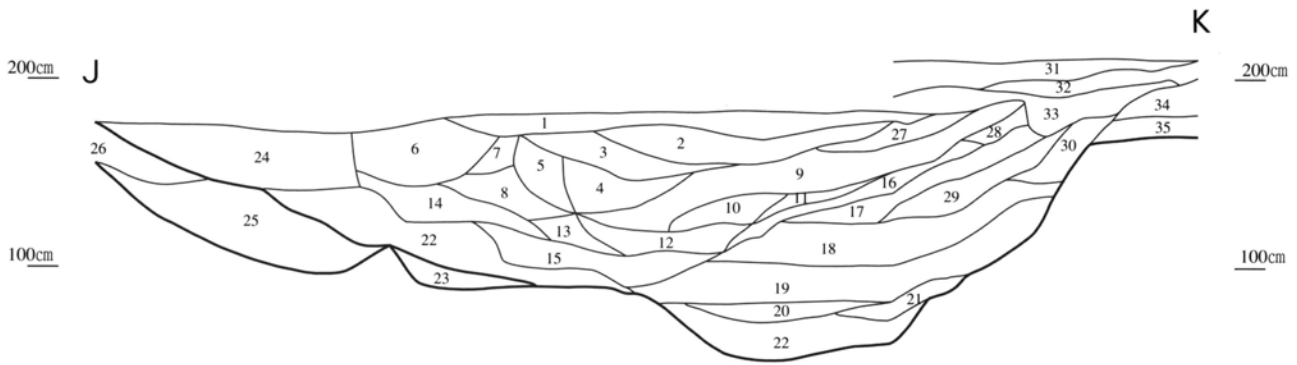


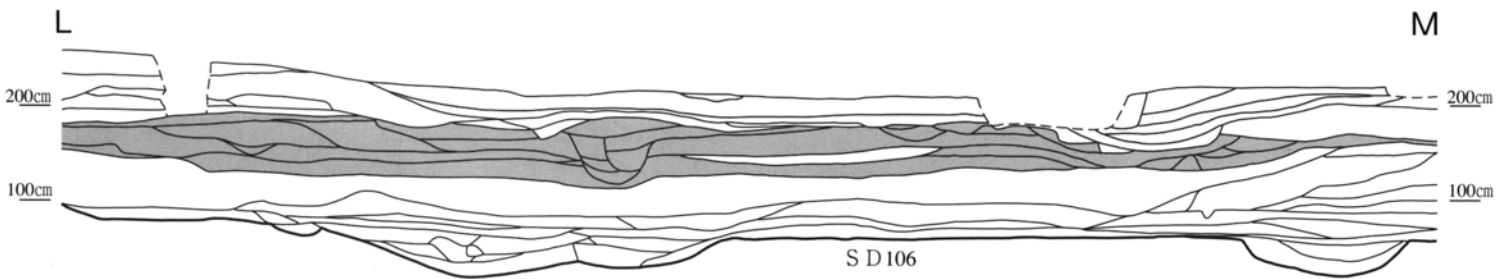
図9 S D 102 南北セクション (1/40)



S D 106

- | | |
|---|--|
| 1 黑色砂 (やや灰色) + 貝 破砕激しい | 19 灰褐色砂 + 黑色砂 + 黄褐色砂 やや互層 |
| 2 黑色砂 (やや灰色) + 貝多い 破砕激しい | 20 黑色砂 (粘質強い) + 木片 |
| 3 黑色砂 (やや灰色) + 貝多い 破砕激しい | 21 灰褐色砂 + 黑色砂 + 黄褐色砂 やや互層 |
| 4 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) | 22 灰褐色砂 + 黑色砂 + 黄褐色砂 互層 |
| 5 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) | 23 灰褐色砂 + 黑色砂 + 黄褐色砂 互層 |
| 6 黑色砂 (やや灰色) + 貝多い 破砕激しい | 24 黑色砂 (灰色強い、やや砂質) |
| 7 黑色砂 (やや灰色) + 貝多い 破砕激しい | 25 黑色砂 (灰色強い、やや砂質) + 黄灰色砂ブロック (1~3 cm) を含む |
| 8 黑色砂 (やや灰色) + 貝 | 26 黑色砂 (灰色強い、やや砂質) + 灰褐色砂 |
| 9 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) | 27 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) 破砕激しい |
| 10 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) | 28 黑色砂 (やや灰色) + 貝極めて少ない |
| 11 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) 破砕激しい | 29 暗灰褐色砂 |
| 12 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) | 30 暗灰褐色砂 + 黄灰色砂ブロック (1~5 cm) を含む |
| 13 貝 (ハマグリ主体、シジミ、カキ) + 黑色砂 (やや灰色) | 31 灰白色シルト |
| 14 黑色砂 (やや灰色) + 貝 | 32 灰白色シルト + 暗灰色シルト + 黑色砂 (有機質強い) |
| 15 黑色砂 (やや灰色) + 貝 | 33 黑色砂 (有機質強い) + 暗灰色シルト |
| 16 黑色砂 (やや灰色) + 貝極めて少ない | 34 黑色砂 |
| 17 黑色砂 (やや灰色) + 貝 (カキ主体) 多い 破砕激しい | 35 黑色砂 + 黄灰色砂ブロック (1~3 cm) を含む |
| 18 灰褐色砂 (やや黄色) | |

図 10 S D 106 東西セクション (1/40)



灰白色シルト・砂・粘土 貝を含む層

図 11 S D 106 南北セクション (1/80)

96調査区のSD 104の東部分の2層以下では、IV・V期の遺物をまったく含まないことが判明し、この時期の所属であると判断した。溝はIF 17sまたはtグリッド付近で途切れるものと考えられるが、その部分にはSD 106、SD 107が横切るように走っており不明瞭である。調査時点での溝幅は3～3.5m、深さ1～1.2mを測る。遺物の取り上げは、1～3の3層に分けておこなったが、区分は任意である。

D. SD 40

SD 105が丁度途切れる部分の、南約5mのところに、ほぼ平行して5m程の長さにわたって走る、幅1～1.3m、深さ0.4～0.6mの溝である。

E. SD 36・37・38・39

4本とも幅1m前後、深さ0.5m、長さ3～4mを測る溝で、SD 36と39からは完形品の太頸壺が横たわった状態で出土している。

(2) 土坑

A. SK 110

長径2.9m、短径1m、深さ0.5mを測る楕円形の土坑で、北西側に段をもつ。

(3) 土器棺

A. SK 111

正立した状態で、頸部下位から上を打ち欠かれた太頸壺(747)が出土する。

B. SK 113

頸部から上を打ち欠かれた、正立した状態の太頸壺(749)の上部に倒立した太頸壺の底部(748)が蓋をするような状態で出土した。掘り込みはほぼ土器に沿ったものである。

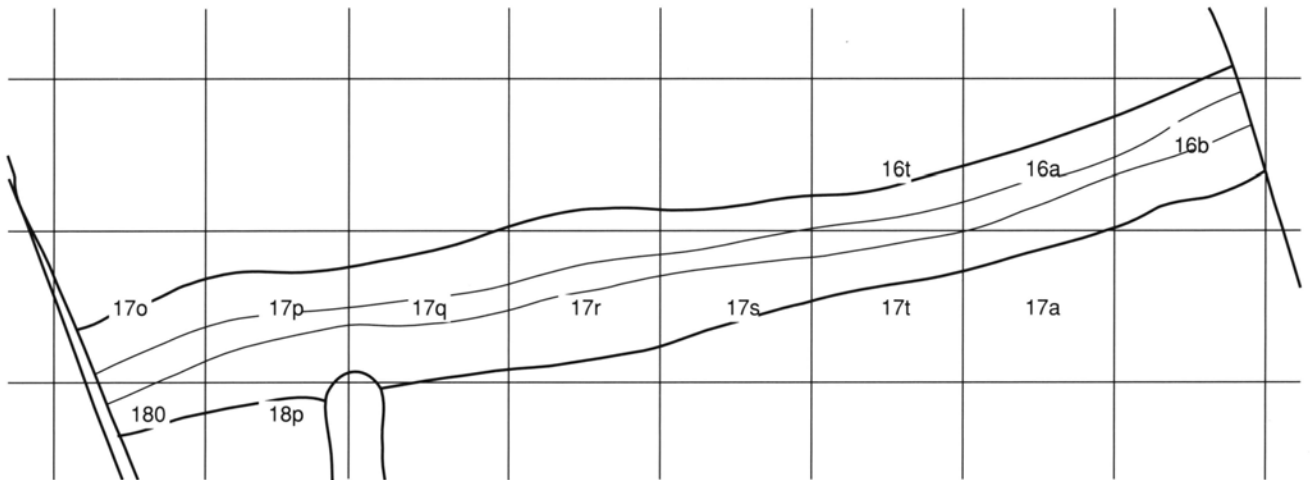


図12 SD 101グリッド配置

表3 96調査区SD 104・105 グリッド・層位別出土遺物一覧

	17o	18o	17p	17q	17r	17s	16t	17t	16a	17a	16b
1層	V			VI	IV	IV	II～III	IV	IV	IV	II～III
貝層	IV	V	IV	II～III							
2層			IV		IV		II～III	II～III	II	II	II～III
3層	II～III		II～III	IV	IV	II	II～III	II	II	II II	

4. IV・V期

(1) 溝

A. SD 103

SD 102の南約3mのところを、平行して走る溝で、幅3.5～4.0m、深さ1.2～1.5mを測る。底部面から10cm程の最下層には砂の互層状堆積がみられ、わずかに水流があったこと窺え、95調査区でも西にいくに従いさらに厚くなっている。遺物の取り上げは、95調査区では上層1～3、下層4～6、最下層というように分け、96調査区では1～4層に分けて行っている。そのため95調査区上層1～3は96調査区の1・2層、下層4～6と最下層は96調査区の3・4層に対応する。上層ではVI期遺物が混入するが、下層では安定しており、IV～V期の遺物で占められている。

B. SD 104

SD 103の南を平行して走る、幅3.0～3.5m、深さ1.0～1.2mを測る溝で、95調査区の西端ではSD 104と違って北西側に大きく屈曲する。

またII・III期のSD 105のところでも述べたが、SD 104は96調査区の東部分まで連続しておらず、中位で収束するか、またはSD 106として調査時点では認識していたが、15s・16sグリッドではIV・V期の遺物が出土しており、95調査区と同様に北に屈曲する可能性もある。

SD 103ではほとんど貝廃棄はみられなかったが、SD 014には多く、95調査区の西端、95調査区の東半部分、96調査区の西端の何ヶ所かで見られた。廃棄は下層には無く、溝が半分程埋没した後、上層部分に行われている。貝の種類はほとんどがハマゲ

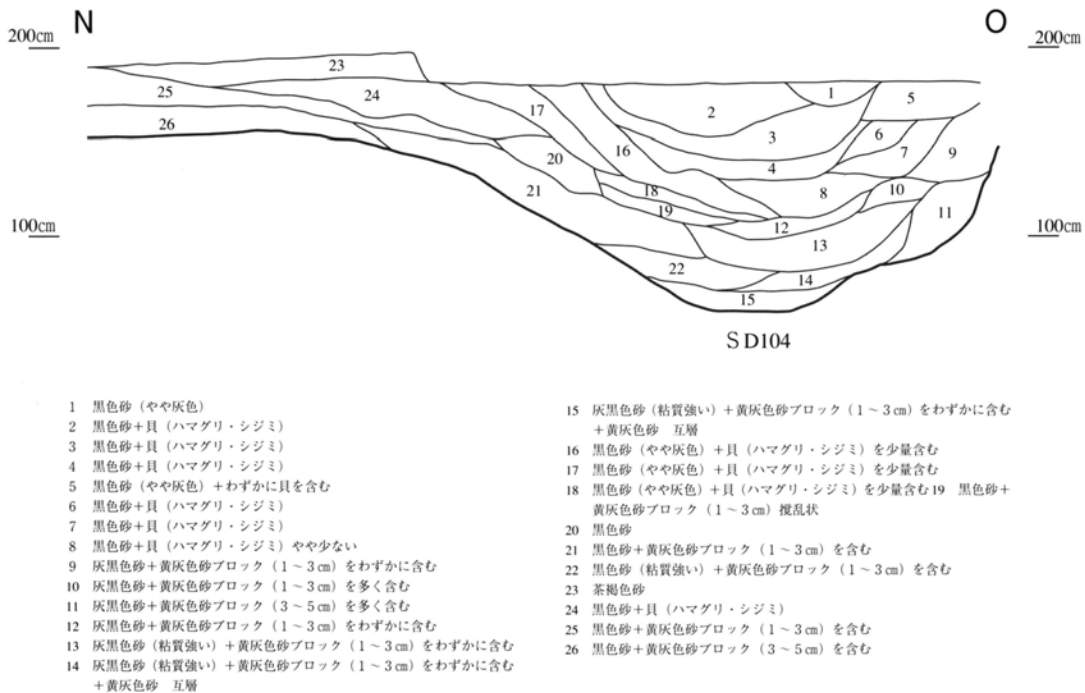


図13 SD 104南北セクション (1/40)

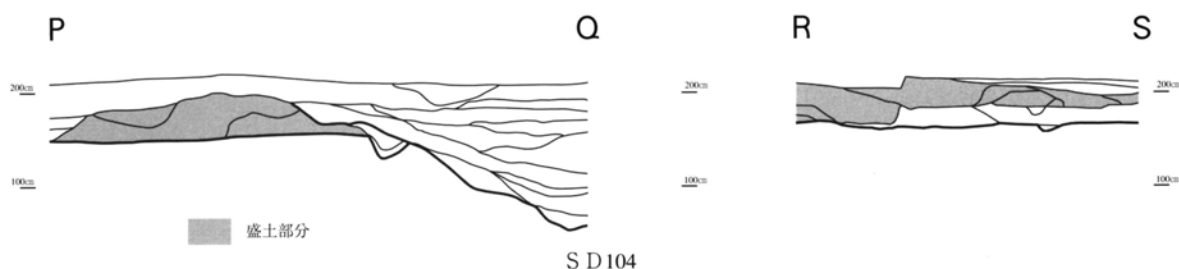


図14 S D 104 盛土部 (1/80)

リ・シジミで、カキは極少量しか含まれない。水流の有無ははっきりしないが、底面部分10cm程に互層がある。

また、96調査区の西側では溝掘削時に積まれたと考えられる攪乱土が、北・南の両肩に沿ってみられた。

C. S D 108

96調査区の南をほぼ東西に走る溝で、調査区中央部でS K 104に突き当たるようにやや南西に屈曲して収束する。幅2.5～3.0m、深さ0.8～1.0mを測る。堀肩か底面までの約2/3程の貝層の再下面までを2層とし、1～3層に分けて調査を行った。上層より、1層一貝層（1層貝層—2層貝層）—2層—3層の順に掘削し、遺物を取り上げた。貝層内または2層より上位では、VI期遺物が比較的多く出土している。貝の種類はハマグリ・シジミが主体で、少量ではあるが灰色化した焼けた貝も出土している。

D. S D 33

S D 108がSK104とぶつかる北側にある溝で、幅1.5～2.0m、深さ1.0で、調査所見によればS D 108より新しく掘削されている。長径は南が不明であるが、S K 104でやはり途切れているようなので、約5m程になる。

E. S D 16・17・18

両溝ともほぼ東西に走る溝で、S D 16が長径約7.5m、短径2.5m、深さ1.1mを測り、S D 17は長径約3.5m、短径1.1m、深さ0.8mを測る。S D 17が後に掘削され、中位よりほぼ完形の細頸壺が横たわっ

た状態で出土している。S D 18もS D 17の1m程東に同方向で並ぶ溝で、長径6.7m、短径1.7m、深さ0.7mを測る。中位より多数の土器の出土をみた。

F. S D 21

95調査区のS D 104が屈曲する部分の南に走る溝で、東端がやや北にふれるが、長軸がほぼ東西を向く。長径は不明であるが、短径2.3m、深さ0.8mを測り、中位から上位にかけてまとまった土器の出土をみた。

G. S D 22・S K 95

本来はS D 22が南まで延び、同一の溝になる可能性もある遺構であるが、調査時の所見ではS K 95部分が再掘削を受けたと考えられたので、別遺構と認定した。S K 95の中位より小型の細頸壺（1138）が出土する。

H. S D 31・S K 124

S D 31は96調査区でS D 104と直交するように走る溝で、幅1.7、深さ1.0mで約9m程延び、S D 104の手前で収束する。溝埋土中位から上位にかけて、溝中央部に破碎の激しい貝（ハマグリ・シジミ）の貝層がみられる。S K 124にも同様な貝廃棄がある。

I. S D 32

S D 104とS D 105の途切れた部分にある、幅1.8m、深さ0.6m、長さ約6mの溝で、完形の沈線紋系土器（1189）をはじめ、下位より土器がまとめて出土している。

(2) 土坑

A. SK 89

SD104の南肩部分に掘削された土坑で、長径3.1m、短径2.2m、深さ1.0mを測る。土坑埋土の大部分はハマグリ・シジミの貝廃棄で形されており、貝層の中心部にあたる位置で、中位から上位にかけて、円窓付太頸壺3点(1160・1163・1165)を含む土器群が出土している。

B. SK 88

SD014の北肩部分に掘削された、長径約2.5、短径1.6、深さ1.4mの土坑である。埋土の中位から上位にはハマグリ・シジミの貝廃棄が行われていたが、これらの貝廃棄は南のSD104の廃棄と連続しており、

SK88開口時にはSD104は中位付近まで埋没しており、そこに貝廃棄が行われていたと考えられる。

C. SK 84

長径1.65m、短径1.6m、0.22mの土坑で、SD42上に掘削されており、調査時には一部SD42として取り上げてしまっている。

D. SK 87

西トレンチ沿いで検出された土坑で、現況では短径0.5m。長径にあたと径が0.3m、深さ0.1mで下体部穿孔土器2点を含む土器群が最下位より出土する。

E. SK 100

SZ349の西溝により切られているため全形は不明であるが、現況では長径1.6m。短径0.9m、深さ0.3mを測り、土器片がまとまって出土している。

F. SK 125

長径1.3m、短径0.7m、深さ0.3mの楕円形の土坑で、埋土に灰白色粘土と黒色砂の、大きさ20~40cmの不定形なブロックが攪乱状に詰まっていた。遺物はごく少量である。

(3) 土器集積

A. SX 03

IF13iグリッド内の黒色砂中位より出土した土器集積で、長径0.8m、短径0.6mの範囲で検出されたが、これらに伴う遺構は検出できなかった。

B. SD 101 土器集積

SD101中位で検出された土器集積で、明らかにSD101に所属するものではないと認識されたが、伴う遺構は検出できなかった。土器と伴に炭化したコナラまたはアカガシの種子(種皮および皮のとれた子葉が多くみられる)が多量に出土する。

(4) 方形周溝墓

A. SZ 352・353

東西径12.7m、南北径9.0mを測る。マウンドは、地山上に堆積した20~30cmの厚さの灰褐色砂上に、40~60cm程の高さに、地山である黄褐色砂を多量に含む灰褐色砂が積まれている。また、北溝と西溝に関しては再掘削されたことが確認されたが、他の溝は確認できなかった。これらマウンド堆積土や溝再掘削はⅥ期に行われたものと考えられる。溝は、北西で途切れる。

B. SZ 354・355

短径が約4.4mを測る小型のもので、マウンドの盛土は確認できなかったが、溝は再掘削されている。調査部分では途切れ部は確認できない。

C. SZ 356・357

南北径9.4、東西径7.3を測る。北溝から西溝にかけては再掘削が明瞭で、多量の土器廃棄がみられた。南溝はSZ358・359と共有する。北東隅のみ溝が連続するが、再掘削によるものと思われる。

D. SZ 358・359

東西径3.4mの小型の方形周溝墓の西側が拡張されたもので、拡張された大きさは東西径が6.4mになる。北西・北東隅では途切れ部は確認できない。

E . S Z 360

北西隅が途切れるもので、東西径が7.8mを測る。

F . S Z 361

北溝の一部のみが確認されている。

G . S Z 362

S D 104と北溝が、S D 108と東・西・南溝が重なり全体はよく判らない。北溝とS D 104の切りあいはよく確認できず、ことによると南にあってS D 108と重なっている可能性もあるが、その他の溝はS D 108掘削前に造られている。南溝底面からは19号人骨が、西溝底面からは22号人骨が出土したが、両者とも堀肩レベルについては確認できない。

H . S Z 363

東西径が4.8mを測る。北溝はS Z 362と共有しており、南溝は不明である。

I . 墓域関連遺構

S D 28

S Z 352・353の北溝の東側突出部分になる。下層のS Z 352に所属するものか。

S D 29

S Z 356・357の東溝の南側突出部分で、下層のS Z 356に所属するものか。

S K 98・99

S K 98はS Z 352の北溝と東溝間の北西隅にある土坑。S K 99はS Z 352・353とS Z 358・359間にある土坑。

S K 104

長径3.1m、短径2.6m、深さ0.8mを測る土坑で、下部部穿孔太頸壺や円窓付太頸壺が出土している。

J . 土器棺

S K 78

I F 18kの黒色砂中より検出したもので、口縁と底部は打ち欠かされている。横倒しの状態で出土しており、体部全周の上半が後世の攪乱により欠損していた。



写真4 S D 104 貝層出土状況



写真5 S X 03 土器出土状態



写真6 S D 101 土器集積

5. VI期

VI期の遺構群については、「I-4. 遺構の概要」でも述べたが、遺物の出土状況からみて、包含層とした黒色砂内に生活面があることが予測できたが、層序からみた面的な調査は行えなかった。極めて粗いメッシュであるが、5mグリッド内でのVI期遺物出土状況を図15に示す。上位の95調査区検出Ⅱと96調査区検出Ⅲ・Ⅳが黒色砂中位～上位、95調査区検出Ⅲと96調査区検出Ⅴ・Ⅵが下位にあたる。これをみると、95調査区の北西と南西、96調査区の北端にはあまりなく、95調査区北半を中心に南東に、幅60～80mの幅で土器出土範囲が広がっているのがわかる。およそその範囲が生活域であったと考えられ、且つ南部地域は墓域として利用されていた可能性が高い。

(1) 溝

A. S D 05

95調査区の西壁からやや弧状に3m程延びる溝で、幅1.4～2.0m、深さ0.4mを測る。下層上位にはまとまった土器の集積があり、それより上を上層、下位を下層とした。また最上層には灰白色粘土堆積が厚い地点で20cm程みられ、小破片になったVI期土器が多数出土している。

B. S D 06

S D 05先端部より、長さ約6m、幅2.5～3.0m、深さ0.8～1.0mの規模でほぼ東西に延びる溝である。下層には土器集積があり、それより下位を最下層とし、上層・下層に分けて遺物を取り上げた。

C. S D 07

計測前に崩壊したため明確な数値あげられないが、長径4～5m、短径3m程の楕円形をした溝で、中位に10cm程の薄い貝層があり、その中に土器集積がみられた。遺物は、貝層を境に上層と下層に分けて取り上げた。

D. S D 08

S D 07と平行するように造られた溝で、切りあいは壁崩壊のため確認できなかった。長径は7.1m、短径約2.0m、深さ1.6mを測り、S D 07と同様に中位に30～40cm程の貝層があり、土器集積がみられた。遺物はそれを境に上層と下層に分けている。

E. S D 09

長径3.5、短径1.8m、深さ1.0mを測る、ほぼ東西に延びる溝である。

F. S D 13

長径3.8m、短径1.5m、深さ1.0mを測る溝で、上層に土器集積がある。土器集積は遺物の残りもよく、厚く堆積しており、上位から6点、下位から1点円窓付太頸壺が出土する。

G. S K 74

検出面ではひとつの土坑か土器集積と考えていたが、最終的には連続した3m程の土坑の切りあいであることが判り、新しく掘られた北側のものをS K 74-1、南側のものをS K 74-2とした。そのため遺物取り上げでは、上層では分割できず、下層において2つに分けている。

(2) 土坑

A. S K 71

径50cm程の土坑が連続して掘削されているもののひとつで、深さ60cmを測り、太頸壺(1675)とタタキ甕(1676)が出土する。S B 03内に関連する土坑である可能性がある。

B. S K 72

長径90cm、短径80cm、深さ30cmを測る小型の土坑で、S B 01に伴う可能性が考えられる。

(3) 住居

A. S B 01・04

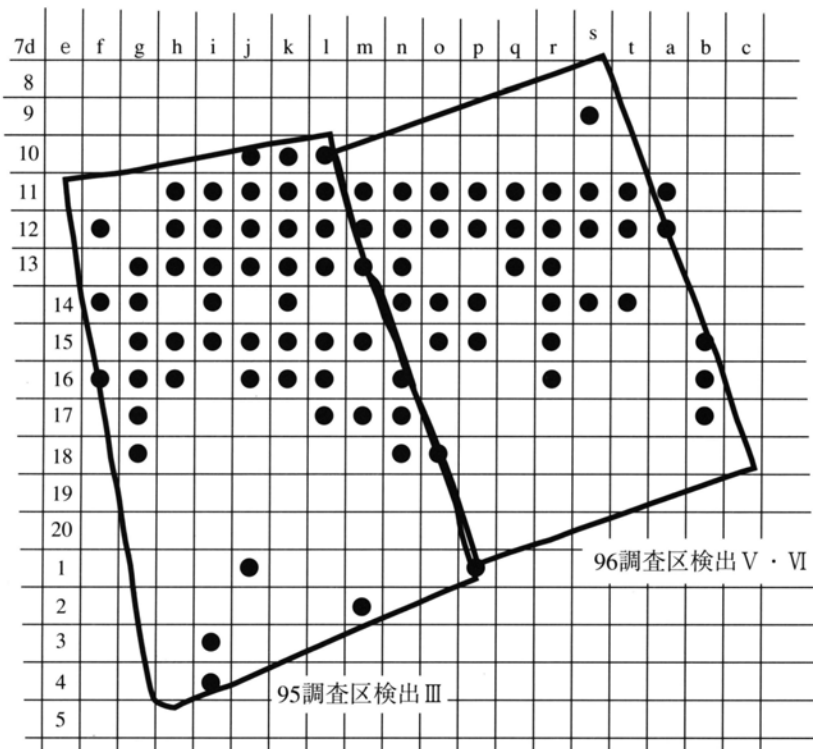
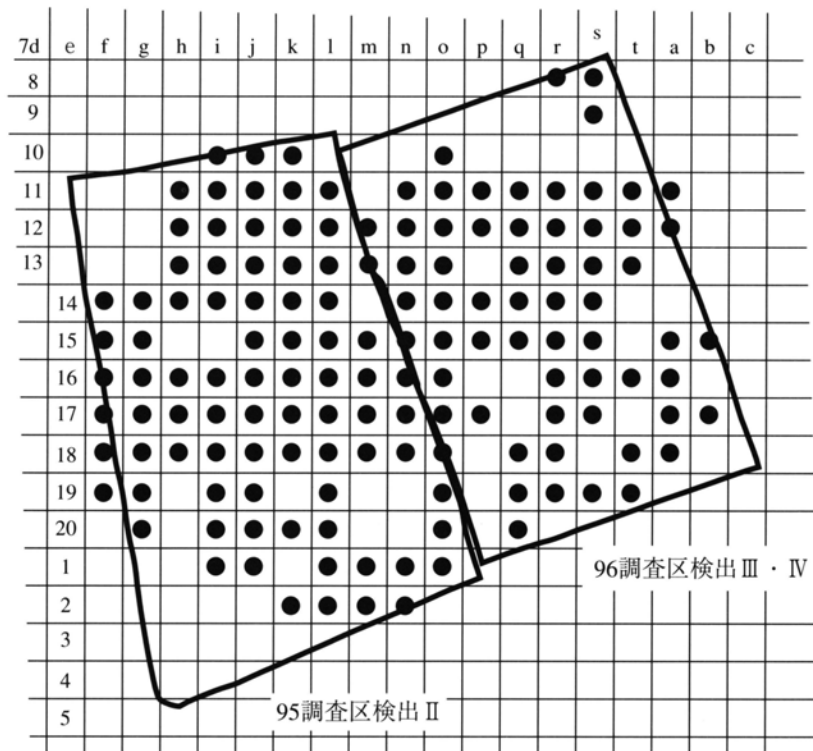


图 15 VI期土器分布 (1/1000)

S B 01は南北径は不明であるが、東西径が6.0 mあり、0.8 m東側に拡張された可能性がある。S X 01はS B 01に伴う可能性があるが、住居廃絶後すぐに廃棄されたものではなく、ある程度埋没した後に廃棄されたと思われる。

S B 04はS B 01を切るが、形態が不定形である。

B. S B 02・03

S B 02は北辺のみ、S B 03は南辺と東辺のみが確認されている。

C. S B 05

S B 05は東西径が8.5 mを測るが、2軒の竪穴住居が重なっている可能性も考えられる。

D. S B 09

北辺と東辺のみが確認されている。S Z 341の南溝埋土中からVI期土器がまとめて出土しているが、S B 09に所属していたものとも考えられる。

E. S B 12

東西径3.8 mを測るり、北半は不明。

F. 96 調査区

96調査区で竪穴住居としたものについては、遺物の出土量が極めて少量で時期決定は行えなかった。また、S B 13～15については、径が2.7～3.2 mと小型であるので、住居であるかどうか疑わしい。ただ、S B 04はVI期になる可能性がある。

(4) 方形周溝墓

A. S Z 351

南にはコ字状の溝、北にはやや弧状をなす溝、西には直線的な溝が配されており、平面形が六角形を呈する。東には溝がみあたらないが、径2 m、深さ0.7 m程のやや角がある円形の土坑があり、上部よりVI期土器が出土しており、これが東側の区切りになる可能性がある。また、北溝に関してはVI期に再掘削されているが、下層のIV・V期の溝には、その他対応する周溝が無い場合、方形周溝墓ではなく単独

の溝と考えた。マウンドには地山土を含む明瞭な盛土がみられる。

B. S Z 364

南西隅が途切れる、南北径2.5 mの小型のもの。溝内からはIV期の無頸壺が出土しており、この時期の溝が再掘削されている可能性はあるが、下層のものが方形周溝墓に関連するものかどうかは判定できなかった。

(5) 土器棺

A. S K 79

黒色砂中で検出されたもので、1372の底部が正立して置かれており、その上にバラバラになった状態で体部上半の1/3程が出土している。蓋のように覆ってあったか。掘り込みは確認できなかった。

B. S K 80・81・82

S Z 351のマウンド上で検出されたもので、各々器径と同様の径の浅い土坑を掘り、正立した状態で据え置かれており、頸部より上部が打ち欠かれている。またS K 82は、別個体の頸部より上と底部を打ち欠いて、上に重ねている。さらにS K 81の内底部より、敲打成形の石錘（石器324）が出土している。

(6) 土器集積

A. S X 01

I F 12h・iの黒色砂下層で検出された土器集積で、60～70 cmの範囲に土器の広がりが見られた。また土器を取り除いた下位には、若干の炭化物が出土した。S B 01への廃棄である可能性もあるが、もしそうならば埋没の最終段階に近い時期に廃棄されたことになる。

B. S X 02

I F 13hの黒色砂下層で検出された土器集積で、1.0～0.5 mの範囲に、土器3点と板状の炭化材が出土している。

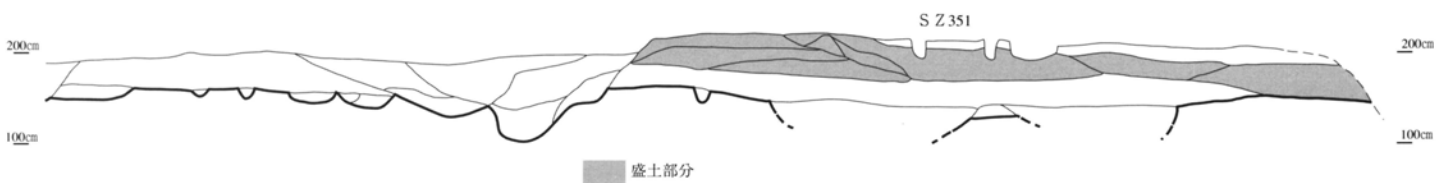


図16 S Z 351 南北セクション (1/80)

6. VII・VIII期

(1) 溝

A. S D 03

96調査区の北壁沿いで検出された溝で、幅70cm、深さ70cmを測る。完形またはそれに近い土器5点を含んだ土器群が、中位より出土する。

B. S D 04

大きさは幅1.2m、深さ0.7mで、S K 66とS K 67をつなぐように走る。掘削は両土坑よりも以前になされており、遺物量は少ない。

(2) 土坑

A. S K 66・67

S K 66は深さ約1.0m程の土坑で、96調査区の東壁沿いで検出された。S K 67は、長径2.5m、短径2.0m、深さ1.2mを測る楕円形の土坑で、上位より太頸壺(1983)と短頸壺(1984)が出土している。

(3) 方形周溝墓

A. S Z 339

長径10.5m、短径9.3m、溝幅1.2～1.5mを測り、長軸が北東から南西を向く。周溝は北西隅が1ヶ所途切れ、南東隅では0.7m程に狭くなり、底面レベルも20～30cm程浅くなっている。また南溝はS Z 342の北溝を再掘削し、共有するように掘られている。マウンド上には[茶色の強い灰褐色砂+灰白色シルトブロックを多く含む]を埋土とする土坑が2基検出されている。S K 52は不定形で、長径が現況で122cm、短径が65cm、深さが14cmを測る。S K 53は三角形を呈し、長径208cm、短径187cm、深さ22cmを測り、ガラス玉(玉類—23)と管玉(玉類—7)が出土している。

遺物は、南溝の底面から高坏を中心とした土器群が並んだ状態で、東・西溝からは壺を中心とした土

器が高低差をもって出土している。

B. S Z 340

S Z 340に関しては、第3面とした黑色砂上面では北溝しか確認できず、第5面に至って全体を確認することができた。

長径8.5m、短径7.8m、溝幅1.0～1.7mを測り、長軸が北北西から南南東を向く。周溝は北東隅が不明であるが、南西と南東隅が途切れる。

遺物は南溝底面および下層から並んだような状態で高坏・太頸壺・台付直口壺・鉢が出土している。また東溝の北東隅部分でもまとまって出土するが、出土レベルは上位である。西溝の南側の底面やや上より絵画・記号が描かれた太頸壺が出土している。

C. S Z 341

長径9.8m、短径9.7m、溝幅1.2～2.0mを測り、長軸はほぼ東西を向く。周溝は北東隅が不明であるが、南西と南東隅が途切れる。周溝は北東と南東隅が途切れ、南西隅部分では底面は浅くなるが上辺はおそらく連続しているような形態をなしている。

遺物量は少ないが、西溝では太頸壺(1819)が体部上位から頸部下半と頸部から口縁部に分けて出土している。

D. S Z 342

長径8.8m、短径8.4m、溝幅1.2～1.7mを測り、長軸はわずかに西北西から東南東を向く。周溝は北西隅がやや不明であるが、おそらく全周する。ただ、南西と南東隅では周溝は幅が50～70cmほどに狭くなり、底面レベルも20～30cm上がる。マウンド上には、[淡黒褐色砂+灰白色シルトブロックを多く含む]が埋土となっているS K 55があり、長径136cm、短径102cm、深さ5cmを測る。形態は、隅丸の長方形または楕円形で、中央部がわずかに2段掘りになっている。

遺物は大部分が東溝で出土しており、検出レベル

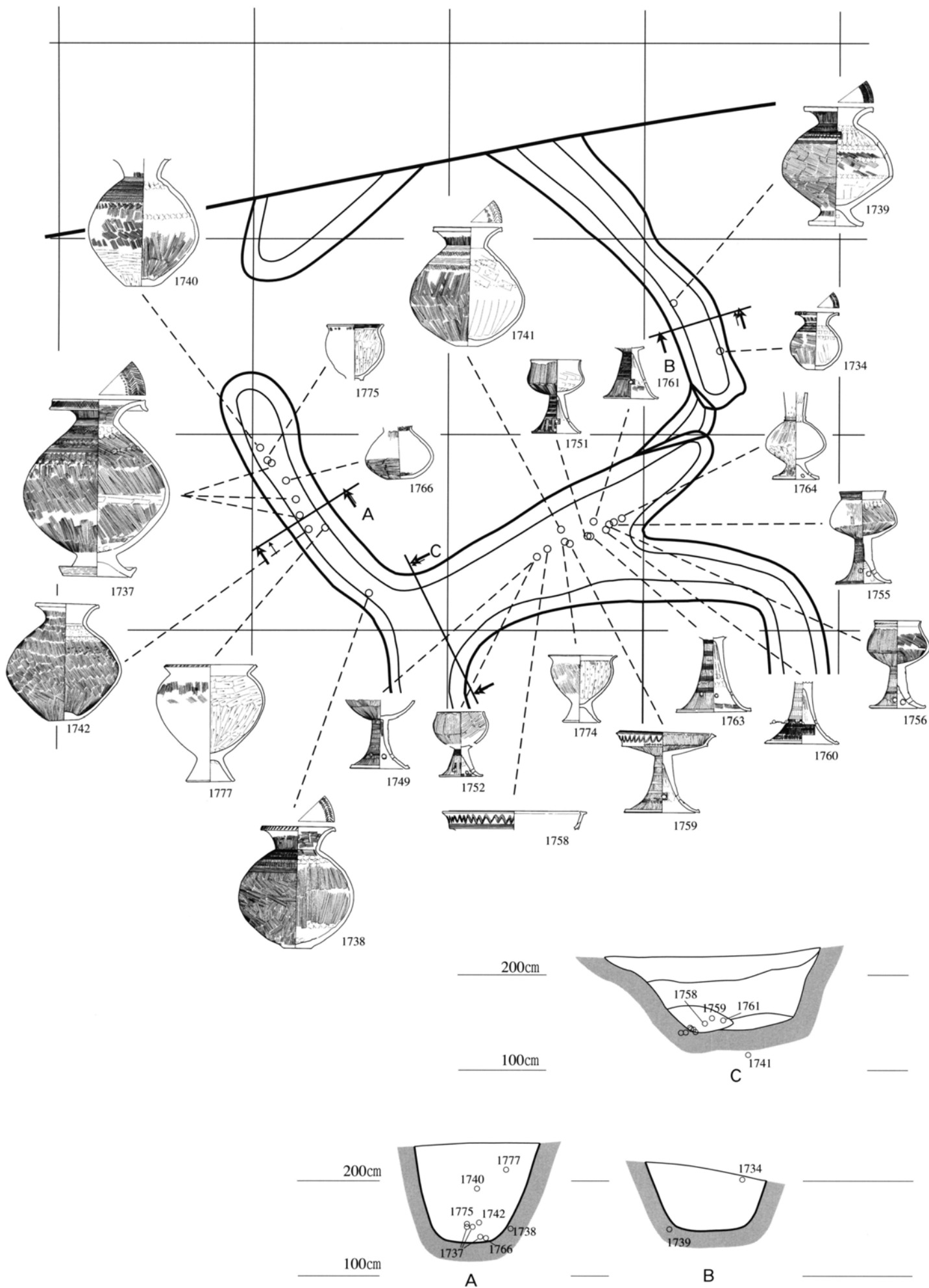


图 17 S Z 339 遺物出土狀況 (1/80)

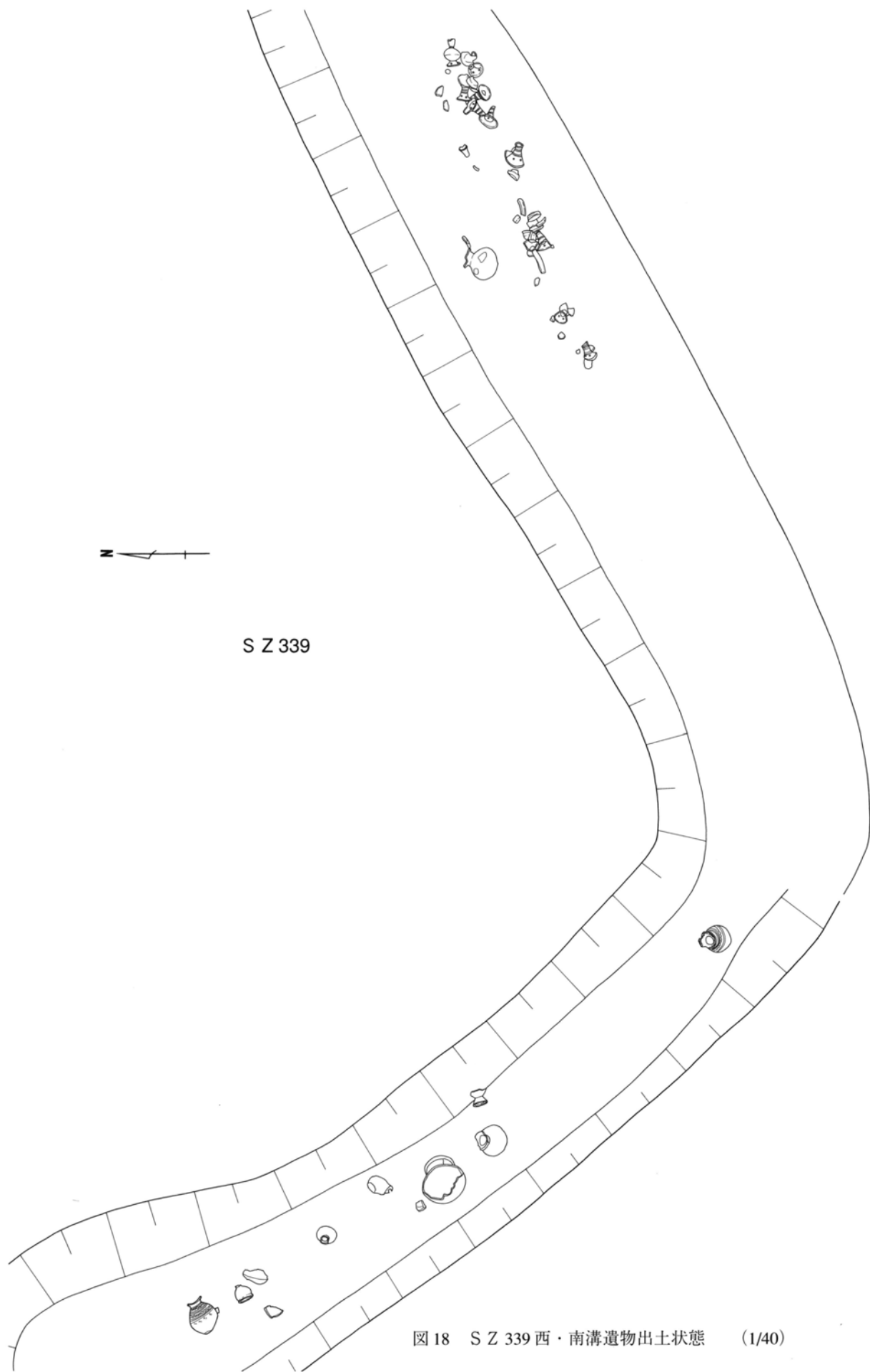


图 18 SZ 339 西·南沟遺物出土状态 (1/40)

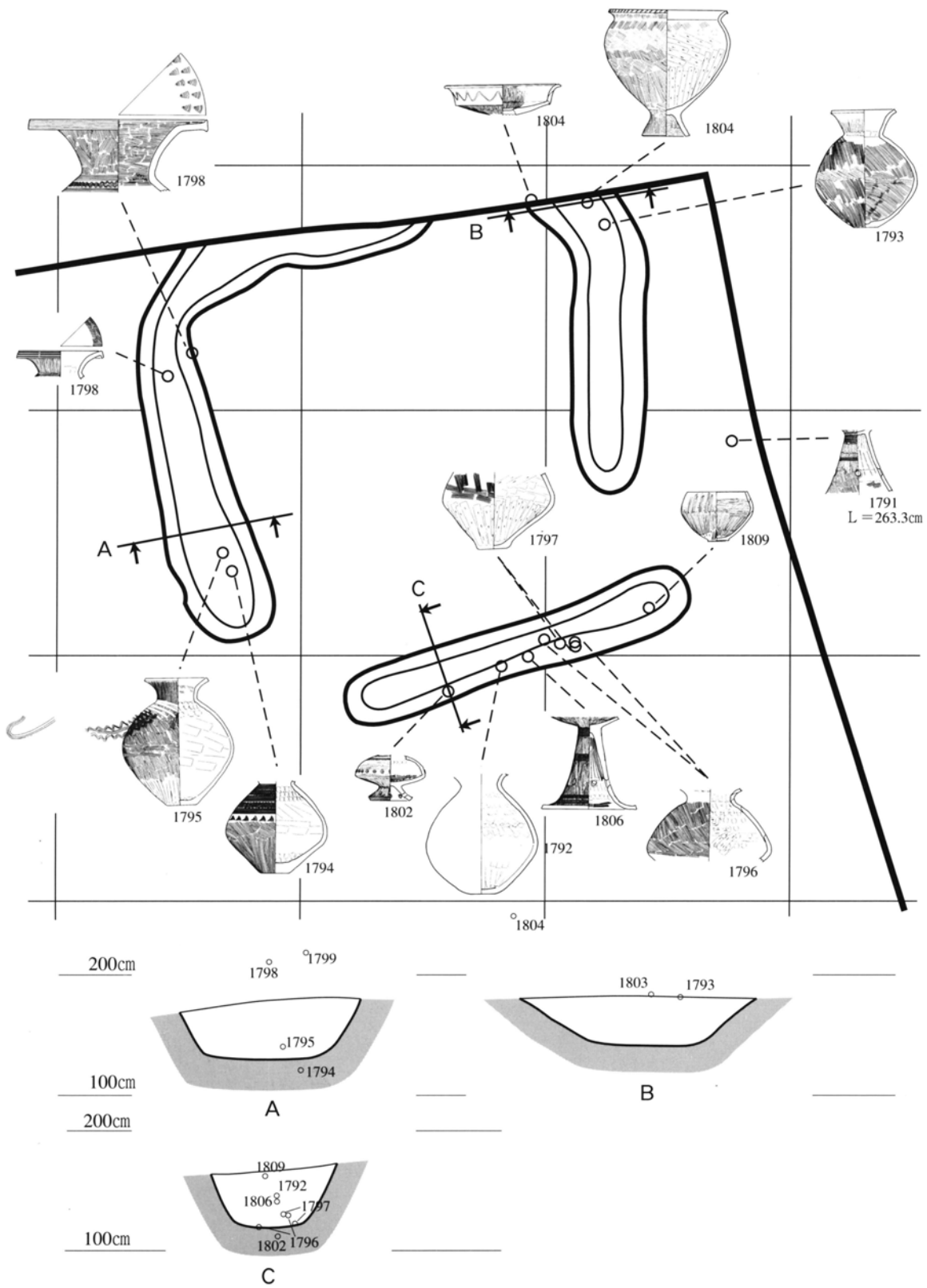


图 19 S Z 340 遗物出土状况 (1/80)

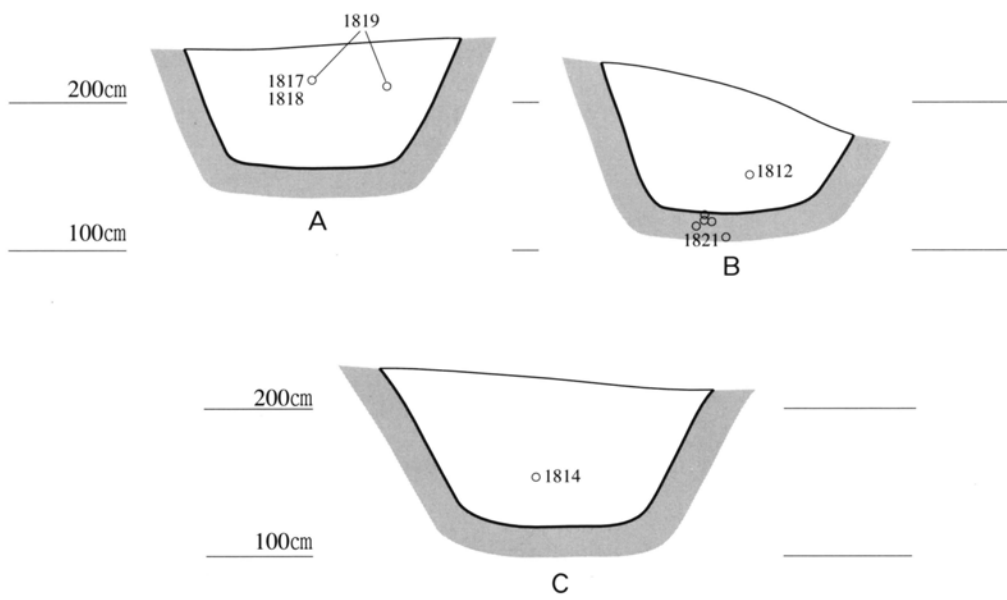
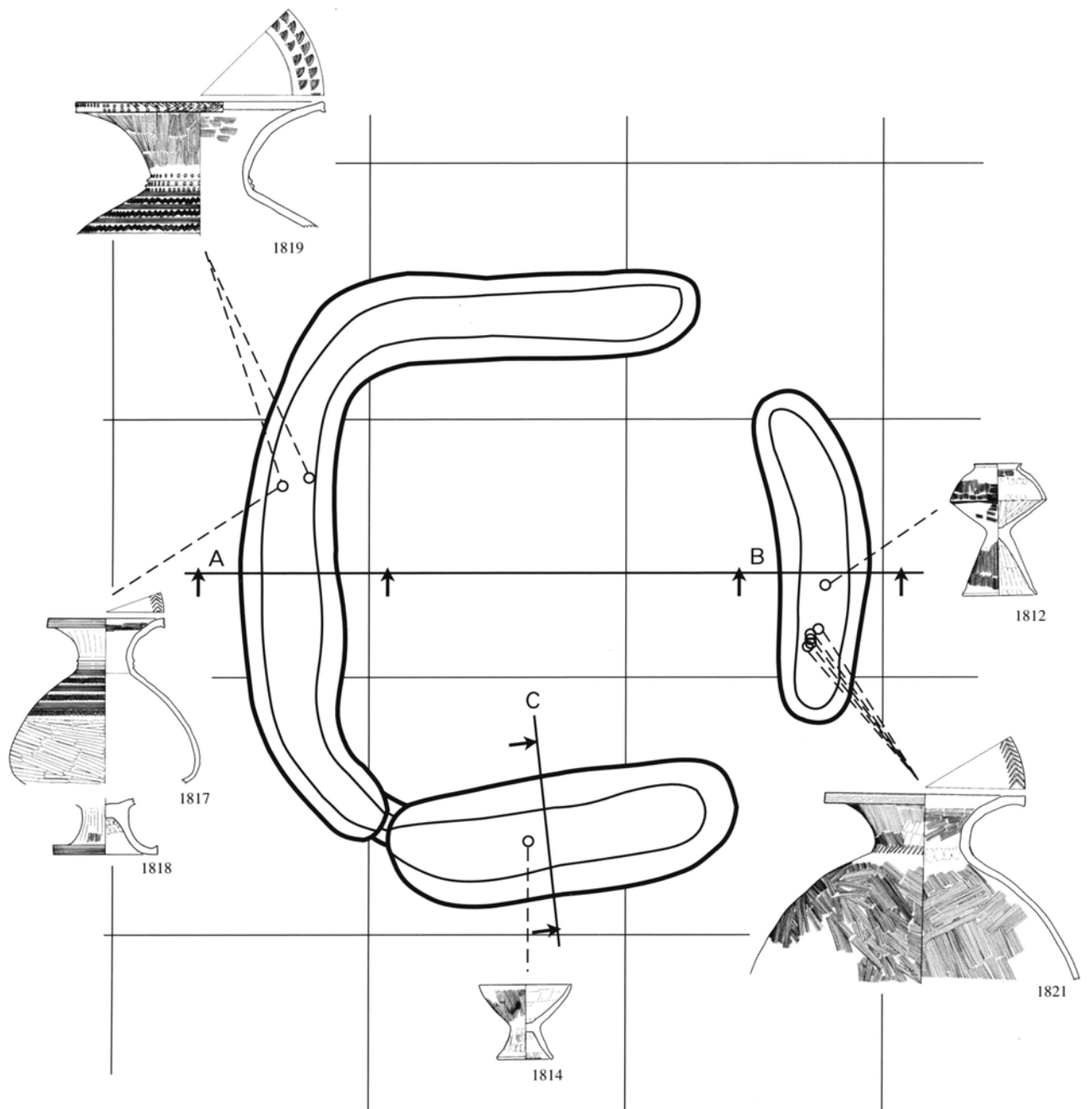


图 20 S Z 341 遺物出土狀況 (1/80)

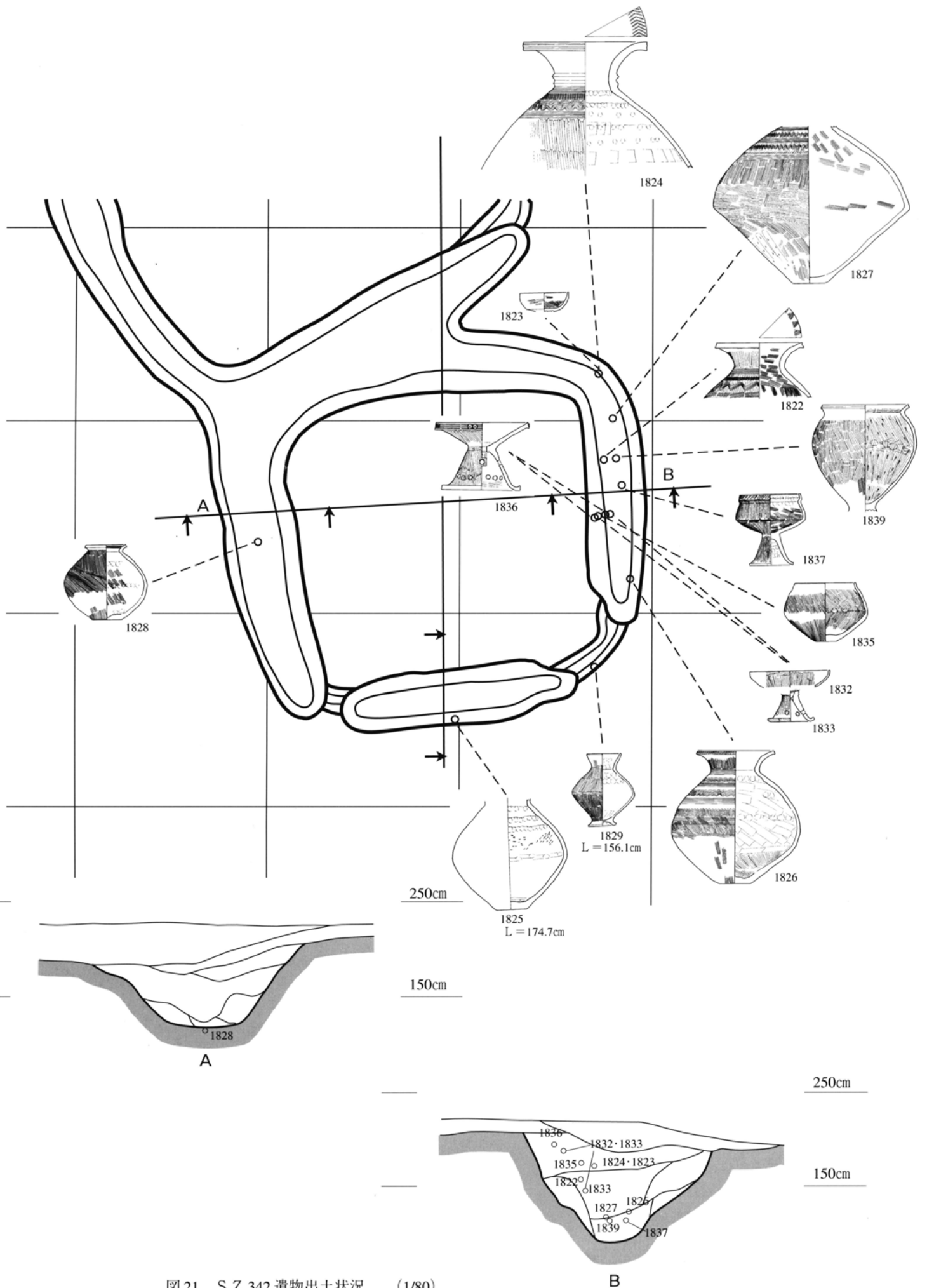


图 21 S Z 342 遺物出土狀況 (1/80)

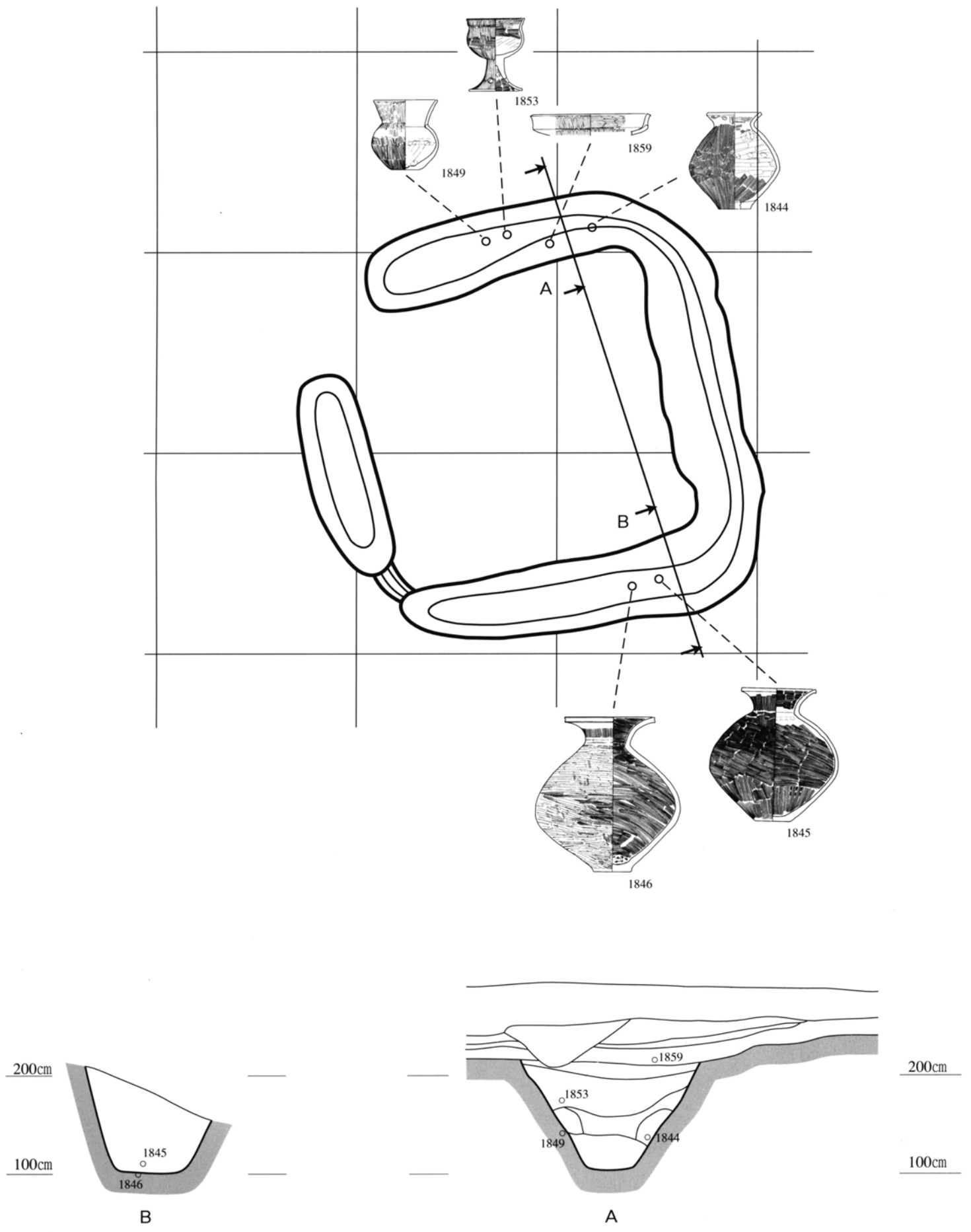


图 22 S Z 343 遺物出土狀況 (1/80)

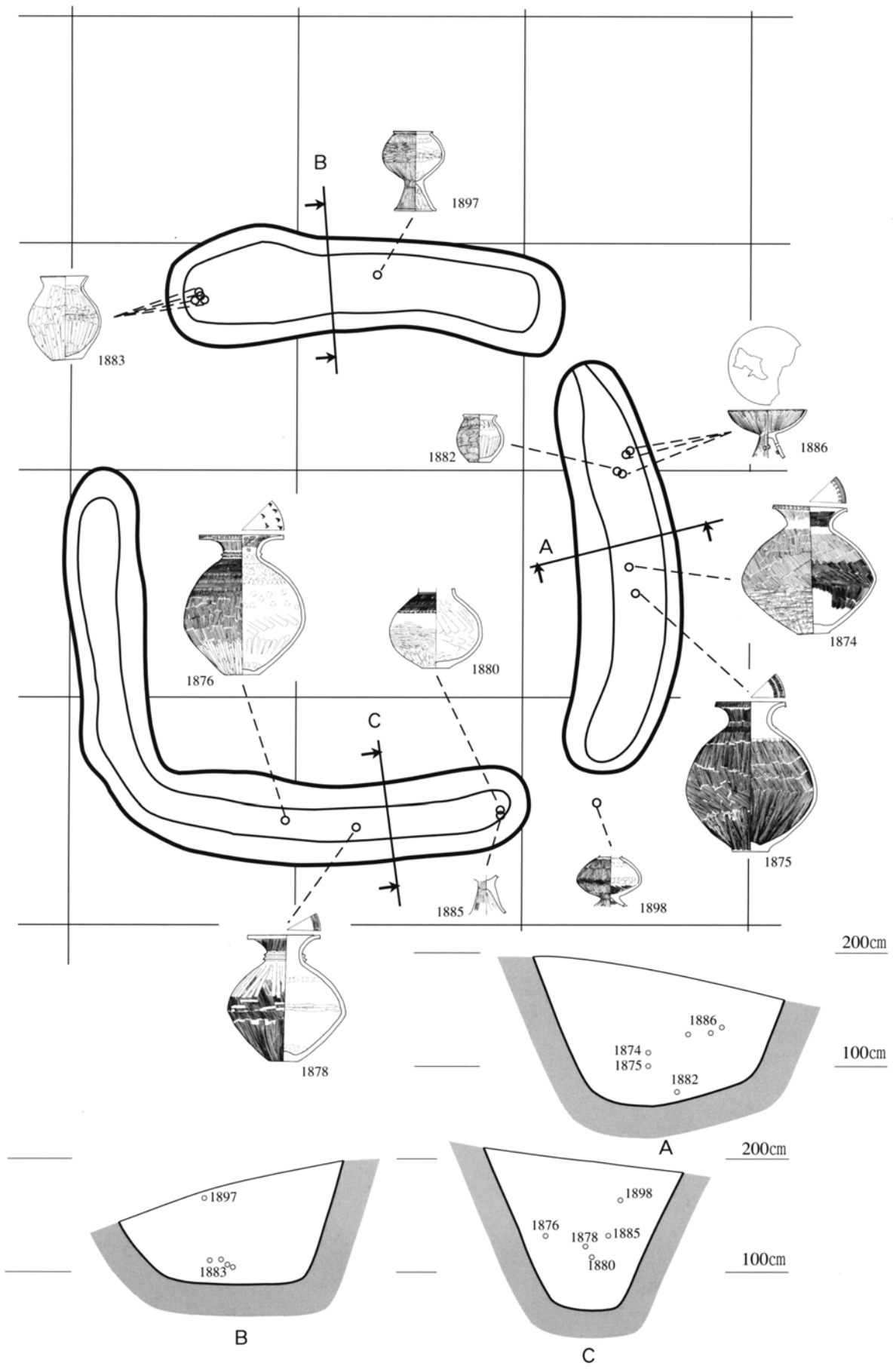


图 23 S Z 345 遺物出土狀況 (1/80)

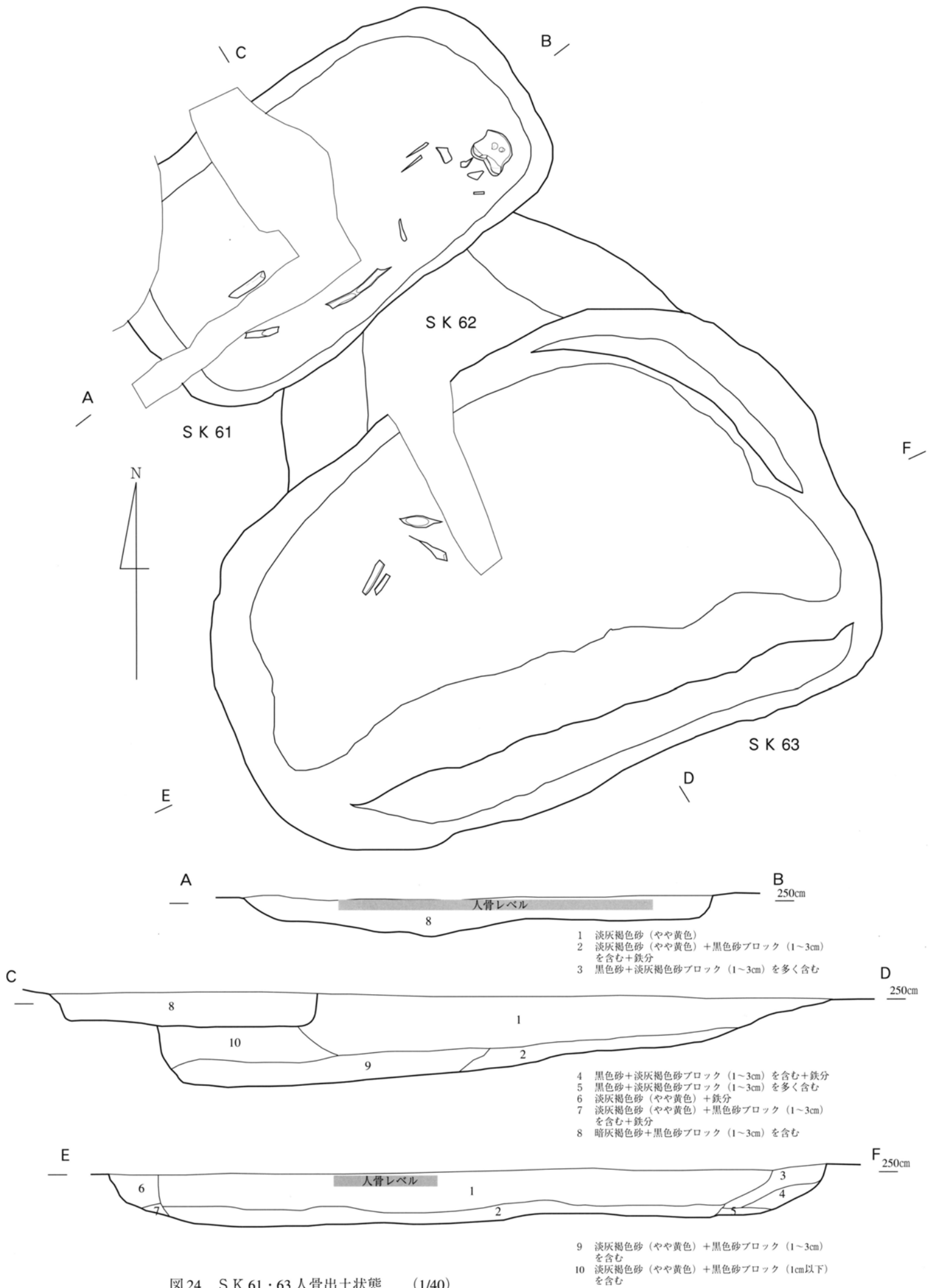


図24 SK 61・63人骨出土状態 (1/40)

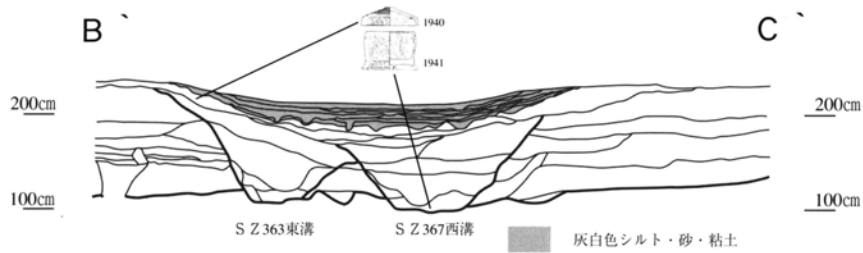


図25 S Z 343・347 セクション (1/80)

も上位から下位にわたる。上位から出土した太頸壺(1824)の口縁部内面には、高坏坏部(1823)が逆さに蓋をするような状態に入れ込んであった。また台付直口壺(1829)が南東隅で細くなっている溝部分の下位より出土する。

E. S Z 343

長径9.0 m、短径8.3 m、溝幅1.6～2.0 mを測り、長軸はわずかに東北東から西南西を向く。周溝は北西隅が途切れ、南西隅が幅0.5 m程で、底面レベルが20 cm程浅くなる、細い溝で連続する。マウンド上には不定形な平面形態を呈する、長径389 cm、短径288 cm、深さ29 cmを測るS K 54があり、[茶色の強い灰褐色砂+灰白色シルトブロックを多く含む]が埋土となっている。

遺物は、北溝では高坏・直口壺が中位から、南溝では太頸壺が下位から出土する。

F. S Z 344

長径7.8 m、短径7.4 m、溝幅1.4～1.6 mを測り、長軸は西北西から東南東を向く。周溝は北西隅が途切れる。マウンド上には不定形なS K 56があり、平

面形態からみると2基重なっているようであるが、区別できなかった。現状での大きさは長径262 cm、短径196 cm、深さ28 cmで、埋土は[やや茶色の灰褐色砂+灰白色シルトブロックを多く含む]である。遺物は南東隅から太頸壺(1870)と甕(1873)がほぼ同位置で出土するが、太頸壺は上位、甕は下位から出土する。

G. S Z 345

長径11.1 m、短径11.1 m、溝幅1.7～2.2 mを測り、長軸はほぼ南北を向く。周溝は北西・北東・南東隅が途切れる。

台付直口壺(1898)が南東隅より出土する。

H. S Z 346

長径9.7 m、短径9.2 m、溝幅1.7～2.3 mを測り、長軸はほぼ東西を向く。周溝は北東隅が途切れる。

I. S Z 347

長径10.5 m、短径10.2 m、溝幅1.7～2.3 mを測り、長軸はほぼ東西を向く。周溝は北西・南東隅が途切れ、東溝がS Z 348の西溝を切り、共有するような形となっている。マウンド上には長径208 cm、短径

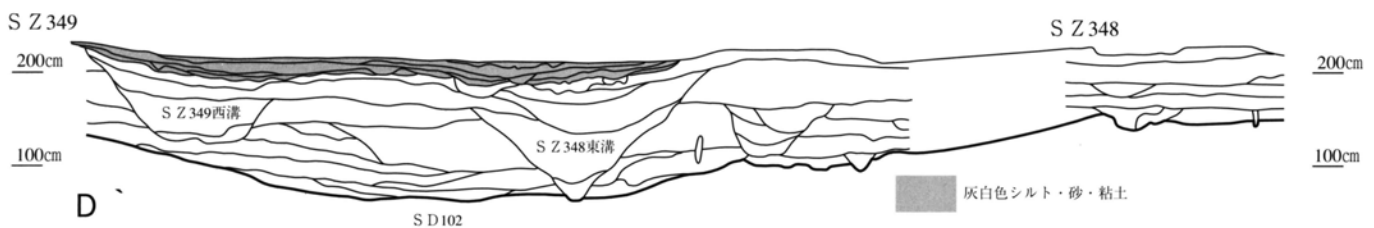


図26 S Z 347・348・349 セクション (1) (1/80)

70cm、深さ20cmの隅丸方形もしくは楕円をなすS K 57がある。埋土は、[やや灰色の茶褐色砂+黄褐色砂ブロックを多く含む]ものとなる。

遺物は西溝中央部最下層より合子型土器(1941)が出土したが、その蓋(1940)と思われる個体はS Z 343の上位より出土しており、S Z 347掘削および合子型土器が蓋と身セットになっていた時点では、S Z 343東溝は埋没途中であったと考えられる。

J. S Z 348

長径11.4m、短径10.8m、溝幅1.8~2.2mを測り、長軸は東北東から南西南を向く。周溝は南西隅が途切れる。マウンド上には、長径212cm、短径92cm、深さ10cmの隅丸方形もしくは楕円をなすS K 59、長径143cm、短径113cm、深さ8cmの楕円をなすS K 58がある。S K 59の埋土は黄灰色砂で、北側の同様な埋土をもつ土坑も一連のものかもしれない。S K 58の埋土は[茶褐色砂+黄褐色砂ブロックを多く含む]ものとなる。

遺物では、絵画・記号のある太頸壺(1954)は、南溝の中央やや東よりで、北斜面沿いの下位より出土する。また北溝の中央部底面には2mを超える(木製品-10)・西溝の南端の中位より(木製品-12)板状の木製品が出土する。

K. S Z 349

東西径は不明であるが、南北径10.0m、溝幅1.7~2.0mを測り、東西軸はわずかに東北東から南西南を向く。周溝は北西・南西隅が途切れる。マウンド上には、S K 61とS K 63がS Z 349の軸線と平行になるように並んで出土している。S K 61が長径201cm、

短径102cm、深さ20cmの長方形、S K 63が長径290cm、短径60cm、深さ29cmの隅丸方形または楕円形をなす。掘削時期はS K 63→S K 61で、S K 63はS K 62と連続して北側に広がっていた可能性が高く、それをS K 61が切り込んでいる。またS K 61の底面から10cm程上位より、頭部から脚部までかろうじて残存する人骨が出土した。この人骨は15歳以上であるという年齢以外、性別は不明であるが、埋葬状態は伸展葬であると思われる。S K 63からも、同様のレベルで人骨が出土するが、小片のため年齢・性別・埋葬状態は不明である。

遺物は、西溝下位より絵画・記号のある太頸壺(1955)が破片の状態で出土している。

L. S Z 350

長径12.8m、短径10.6m、溝幅1.6~2.4mを測り、長軸は東北東から南西南を向く。周溝は北西・南西・南東隅が途切れる。マウンド上には[黄灰色砂+黒色砂ブロックを含む]埋土をもつS K 65がある。S K 65は長径259cm、短径130cm、深さ16cmの隅丸長方形または楕円形をしている。

南溝西側の上位より絵画・記号をもつ太頸壺(1964)が出土する。

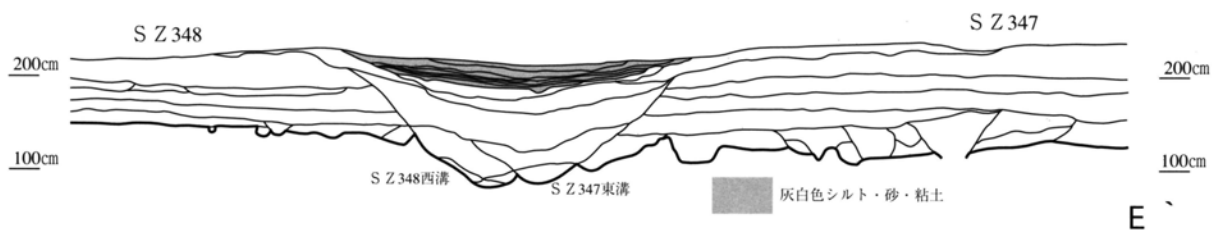


図26 S Z 347・348・349 セクション(2) (1/80)

7. 古墳時代

基本的には、古墳時代のものとして認定した灰白色砂・シルト・粘土と、その下にあるケヤキやスギの流木を多く含むやや灰色がかっている黒色砂がこの時期のものであり、明確な人為的な遺構は確認されていない。つまり、弥生時代後期・中期の方形周溝墓が遺棄された以後の形状がそのまま展開しているとも言える。

ただこのことは、灰白色シルト等の堆積が継続していた時期には、弥生時代の構築物の後が判るぐらいの凹凸が、地上には残されていたとも言える。それらの景観は、現在見るところの古墳時代後期の群集墳のようなものかとも想像される。

さらに北側では完形に近い甕や高坏、勾玉が出土し、貝殻山周辺ではまとまった量の須恵器類がみられる。これらは5世紀後半から6世紀前半のものが大多数を占め、この時期に何らかの人為的な動きがあったことが考えられ、今回の調査区を含めた貝殻山周辺に、居住域または墓域、さらにそれらを合わ

せ持つ集落の存在が想定できる。これらのいずれであるかは現状では判断できないが、以前の調査で北東約500mの場所で、同時期の円墳2基（S Z 1001・1002）が検出されており、95・96調査区付近も同様の墓域であるという可能性も否定できない。もし墓域と考えるならば、S Z 345 や隣接する S Z 342・344、他の周溝が比較的浅くなだらかに埋没しているのに対して、深くまで灰白色シルト・砂が堆積していたものについては、最掘削された可能性を考えられる。セクションの観察からは明瞭な掘削の痕跡は確認できなかったが、再掘削という大規模な土木工事でもなくとも、労力をかけず元来あった高まりを利用し、整えたという程度ならば十分想定できる。

確実な遺構ということでは認定しなかったが、本調査において、貝殻山周辺地域に5世紀後半～6世紀前半期に人為的な遺構の存在する可能性が高まったと考える。

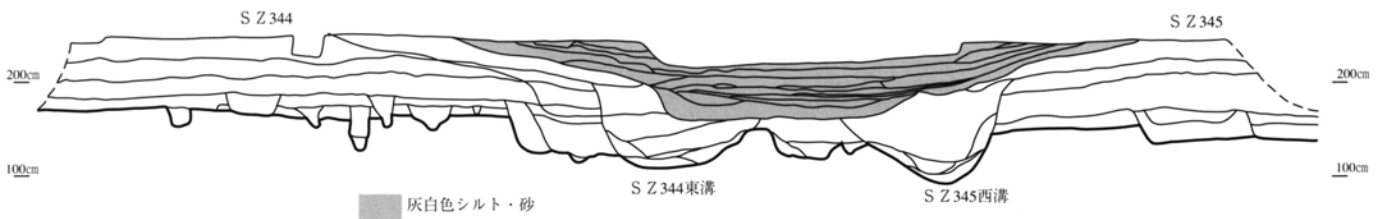


図27 S Z 344・345 セクション (1/80)

8. 中世以降

遺構としては方形土坑と溝のみで、遺物量も少ない。そもため所属時期の判るものがあまりないが、決定できたものについて、遺物の分類に従って記述を行う。

A. 中世1期

13世紀を中心とする時期。

S K 31は長径3.67 m、短径1.36 m、深さ0.54 mを測るもので、小皿が北東部上位より出土している。埋土は灰色粘土と黒色砂の攪乱土である。S K 49は長径2.60 m、短径1.74 m、深さ0.16 mを測るもので、北端より小皿が出土する。S K 01は長径1.75 m、短径1.17 m、深さ0.19 mを測る楕円形をしており、その他の方形土坑とは性格が別である可能性もある。その他S K 02・11・13がある。

B. 中世2期

14世紀～15世紀前半の時期になる。

幅0.97 m、深さ0.29 mを測るS D 02は、95調査区の北西部にあるもので、さらに西側に続いていく。S K 21は長径3.50 m、短径2.61 m、深さ0.46 mを測り、南東隅よりほぼ完形の山茶碗が出土する。

C. 中世3期

15世紀後葉を中心とする時期。

S K 12は長径4.32 m、短径3.14 m、深さ0.98 mを測る大型のもので、下層が灰色粘土、上層が灰色粘土と黒色砂の攪乱土であった。S K 23も長径7.32 m、短径2.65 m、深さ0.40 mを測る大型のもので、側辺が直線的ではない。S K 30では漆椀口縁部やハンノキ属の自然木を用いた杭が出土する。

D. 中世4期

16世紀後葉～17世紀初頭に位置する。

S K 24は長径8.25 m、短径3.40 m、深さ0.62 mを測る大型のもので、埋土は灰色粘土である。東半には段がみられ、中位より馬骨がまとまって出土している。S K 25は長径4.26 m、短径3.12 m、深さ0.72 mを測る、正方形に近い形態をなすもので、隅部分を中心に段があり、底面には0.7m程の浅い円形の土坑がある。S K 15は長径8.36 m、短径5.50 m、深さ1.07 mを測る大型のもので、不定形な菱形に近い形態をしている。埋土は下層が灰色粘土で上層が灰色粘土と黒色砂の攪乱土であった。S D 01は幅1.0 m、深さ0.6 mを測る溝で、西北西から東南東に走り、東側で直角に折れて、次第に不定形に細くなって収束する。掘肩の北側に段がみられ、埋土では流水は確認できなかった。

9. 埋葬人骨

人骨とその埋葬状態については本書の自然科学的分析・考察にある多賀谷昭・山田博之「朝日遺跡出土の人骨について」で述べられているのでここでは、埋葬土壌についてのみふれておく。なおここで取り上げなかった5号人骨については、頭部に沿ったはずかな落ち込みしか確認できず、9・10・17・21号については土壌を確認することはできなかったものである。また11号人骨は欠番となるが、調査時の番号をそのまま使用している。

A. 1号人骨

短径64 cm、深さ10 cmの埋葬土壌があり、その南東部において160～170 cmの範囲に、埋土が〔灰色が強い黒色砂＋黄灰色砂ブロック(3～5 cm)の攪乱〕という深さ14 cmの不定形な土坑が広がっている。

B. 2号人骨

長径134、短径64 cm、深さ10 cmの埋葬土壌があり、それと同様の長方形をなす長径157、短径104 cm、深さ8 cmの土坑が重なるようにある。外土坑の埋土は黒色砂または〔黒色砂＋黄灰色砂ブロック(1～5 cm)〕

を含む]である。

C. 3・4号人骨

3号人骨では埋葬土壙と外土坑が確認された。埋葬土壙は、長径172cm、短径88cm、深さ10cmで、外土坑の南に寄るように位置する。外土坑は、長径288、深さ10cmで、[やや茶色の黒色砂+黄灰色砂ブロック(5~8cm)を多く含む]が埋土となる。

4号人骨の土壙は3号人骨土壙の後に造られており、短径135cm、深さ10cmで、3号人骨の外土坑と同じ埋土を呈する。

D. 6号人骨

短径130cm、深さ90cmを測る溝状の土坑で、6号人骨はその上位より、廃棄されたように規則性なく、ひとまとまりで出土している。ただこれらは別個体の寄せ集めではなく、1個体である可能性が高い。

E. 7号人骨

長径100cm、短径58cm、深さ8cmの埋葬土壙と長径174cm、短径113cm、深さ8cmの外土坑が検出された。外土坑の埋土は、[灰色の強い黒色砂]である。

F. 8号人骨

長径115cm、短径87cm、深さ6cmの埋葬土壙のみが検出される。埋土は[黒色砂+灰褐色砂ブロック(1~2cm)を多く含む]である。

G. 12号人骨

長径151cm、短径100cm、深さ5cmの埋葬土壙のみが検出される。埋土は、[黄灰色砂+黒色砂ブロック(3~5cm)含む]である。

H. 13号人骨

短径87cm、深さ8cmの埋葬土壙のみが検出される。埋土は、[灰褐色砂質シルト]である。

I. 14号人骨

長径約180cm、短径60cm、深さ12cmの埋葬土壙と長径174cm、短径106cm、深さ8cmの外土坑が検出された。北端では両土坑と人骨が重なり、確認ができていない。埋土は、埋葬土壙が[やや黄色の明灰褐色砂]で、外土坑は[やや黄色の明灰褐色砂+黄褐色

砂ブロック(1~3cm)の攪乱]である。またこの外土坑の埋土は盛り上がるように14号人骨を覆っていた。

J. 15号人骨

長径163cm、短径74cm、深さ4cmの浅い長方形の埋葬土壙のみが検出される。埋土は、[やや粘質の暗灰褐色砂]である。

K. 16号人骨

長径約180cm、短径74cm、深さ10cmの埋葬土壙と長径約190cm、短径約170cm、深さ12cmの不定形な外土坑が検出された。外土坑は埋葬土坑の北と東、南東に広がり、埋土は[灰黒色砂+黄灰色砂ブロック(1~3cm)の攪乱]となる。

L. 18号人骨

長径約178cm、短径75cm、深さ10cmの埋葬土壙と長径195cm、短径103~132cm、深さ4cmの外土坑が検出された。外土坑の底面は平坦ではなく、やや内に向かって傾斜している。

M. 19号人骨

埋葬土壙は確認できなかったが、頭部位置に19号人骨と併行するように、長径230cm、短径約100cm、深さ15cmの土坑と移動した脚部側に長径80cm、短径60cm、深さ20cmの土坑が検出される。埋土は[黒色砂]。

N. 20号人骨

長径約127cm、短径102cm、深さ8cmの埋葬土壙と長径225cm、短径138cm、深さ6cmの同心円状に大きくなる外土坑が検出された。外土坑の埋土は、[灰色強い黒色砂+黄灰色砂ブロック(5cm以上)を多く含む]となる。

O. 22号人骨

長径96cm、短径81cm、深さ8cmの楕円形の埋葬土壙のみが検出される。埋土は、[黒色砂]である。

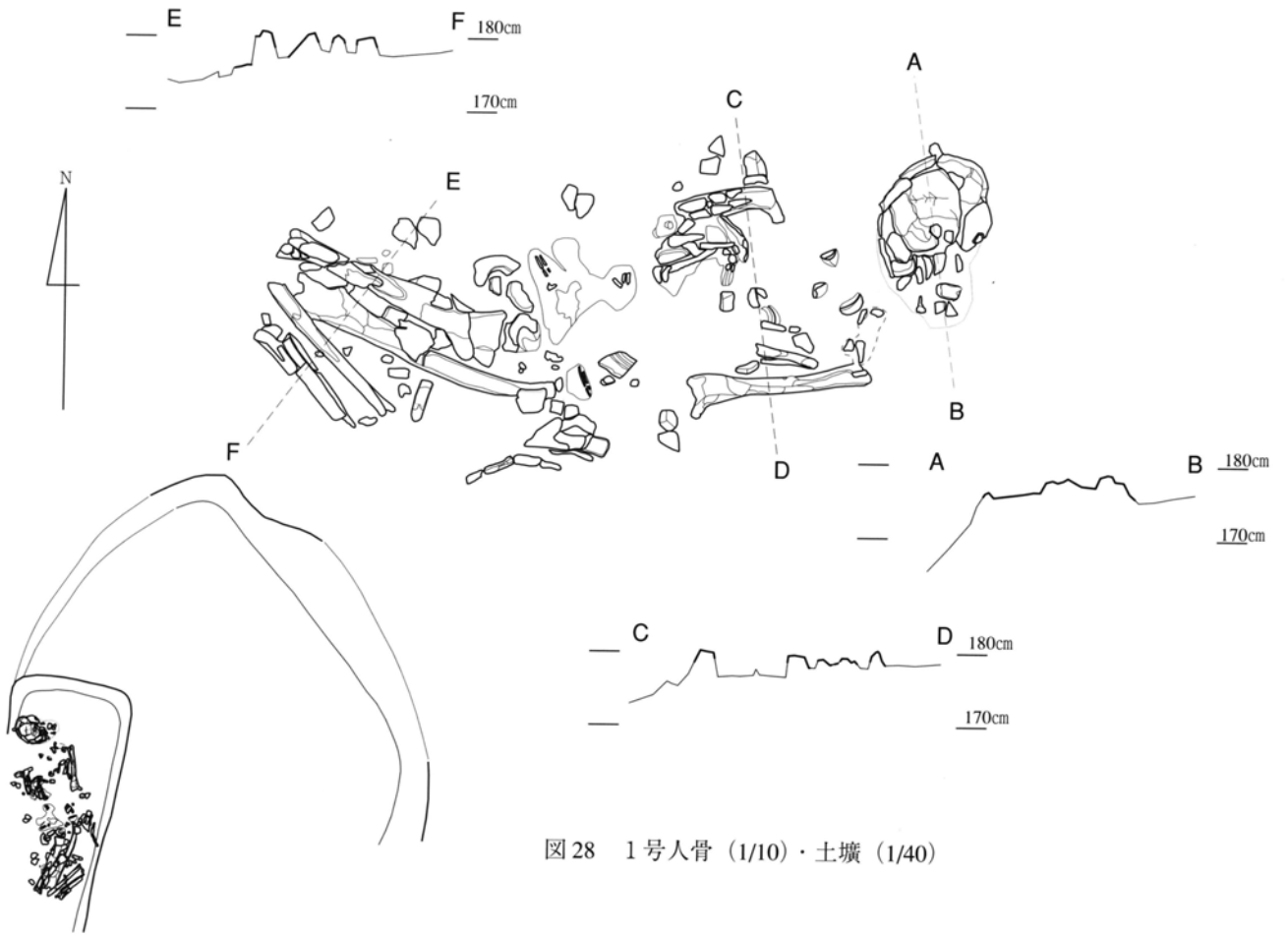


图28 1号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)

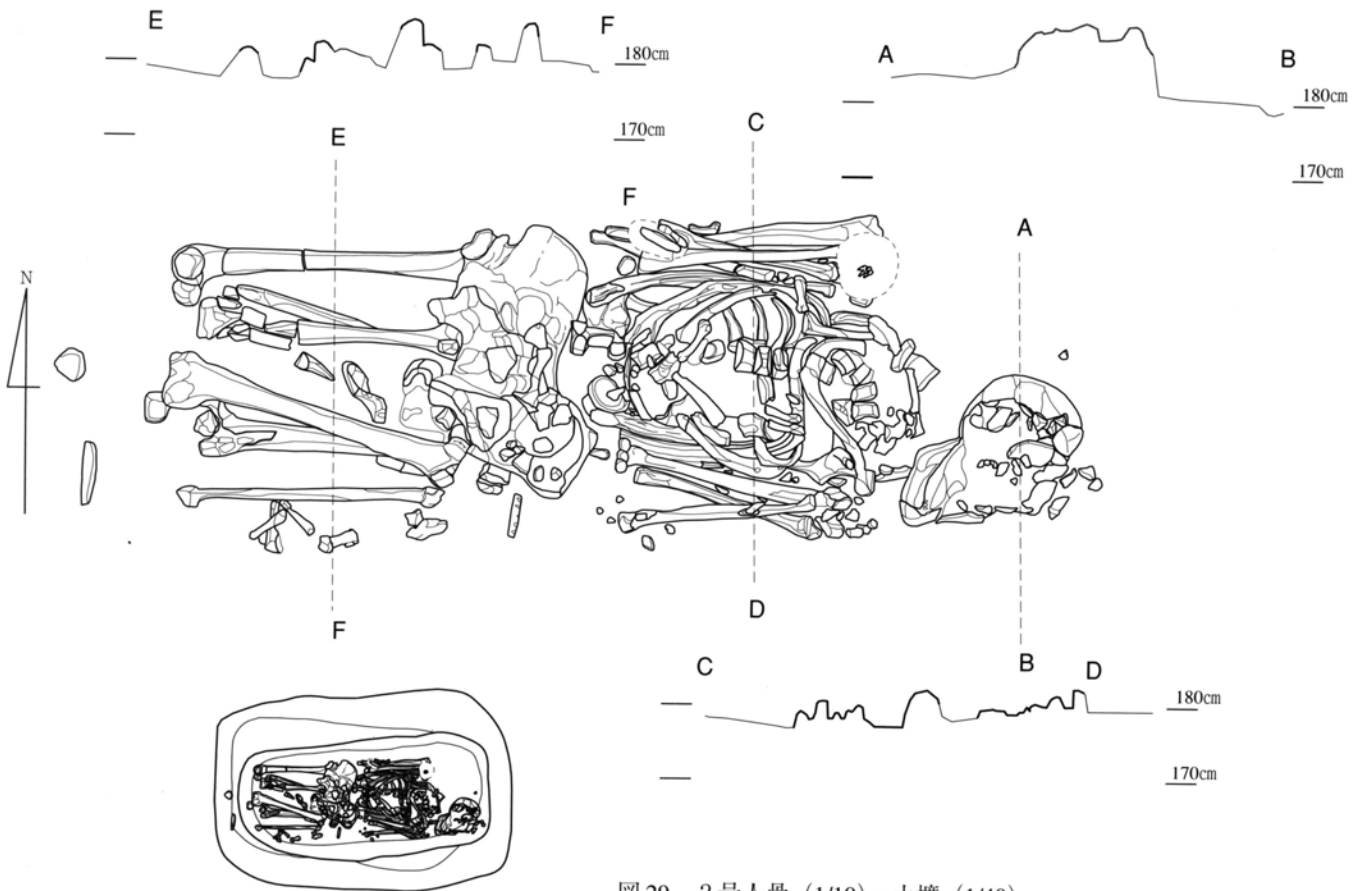


图29 2号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)

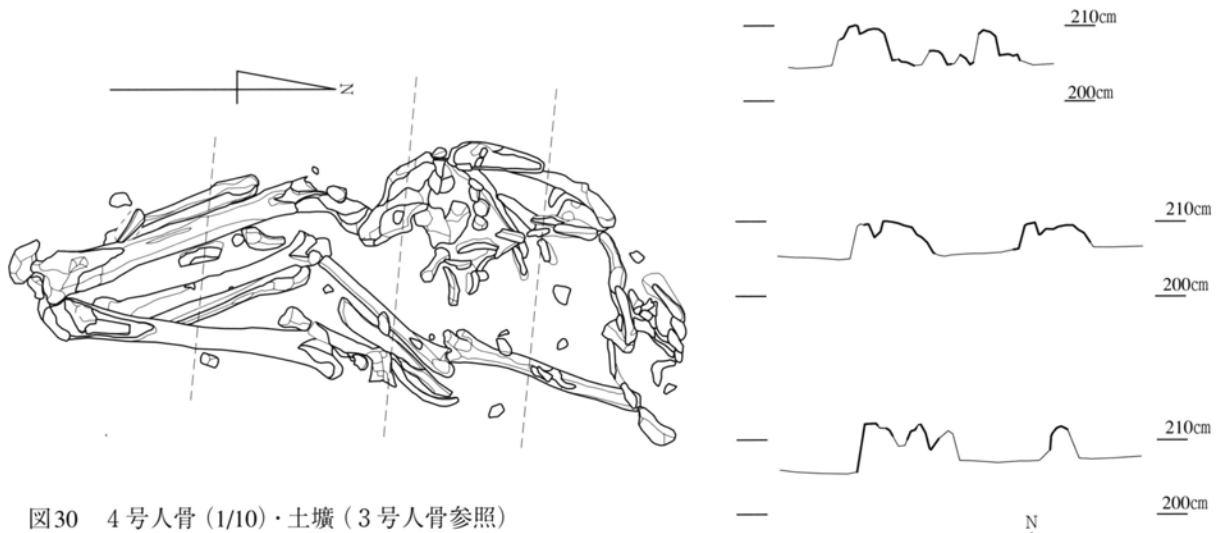


図30 4号人骨 (1/10)・土壙 (3号人骨参照)

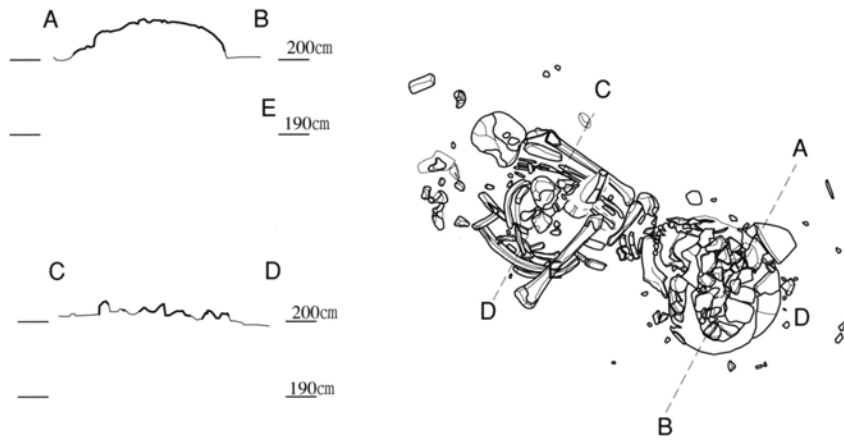


図31 5号人骨 (1/10)

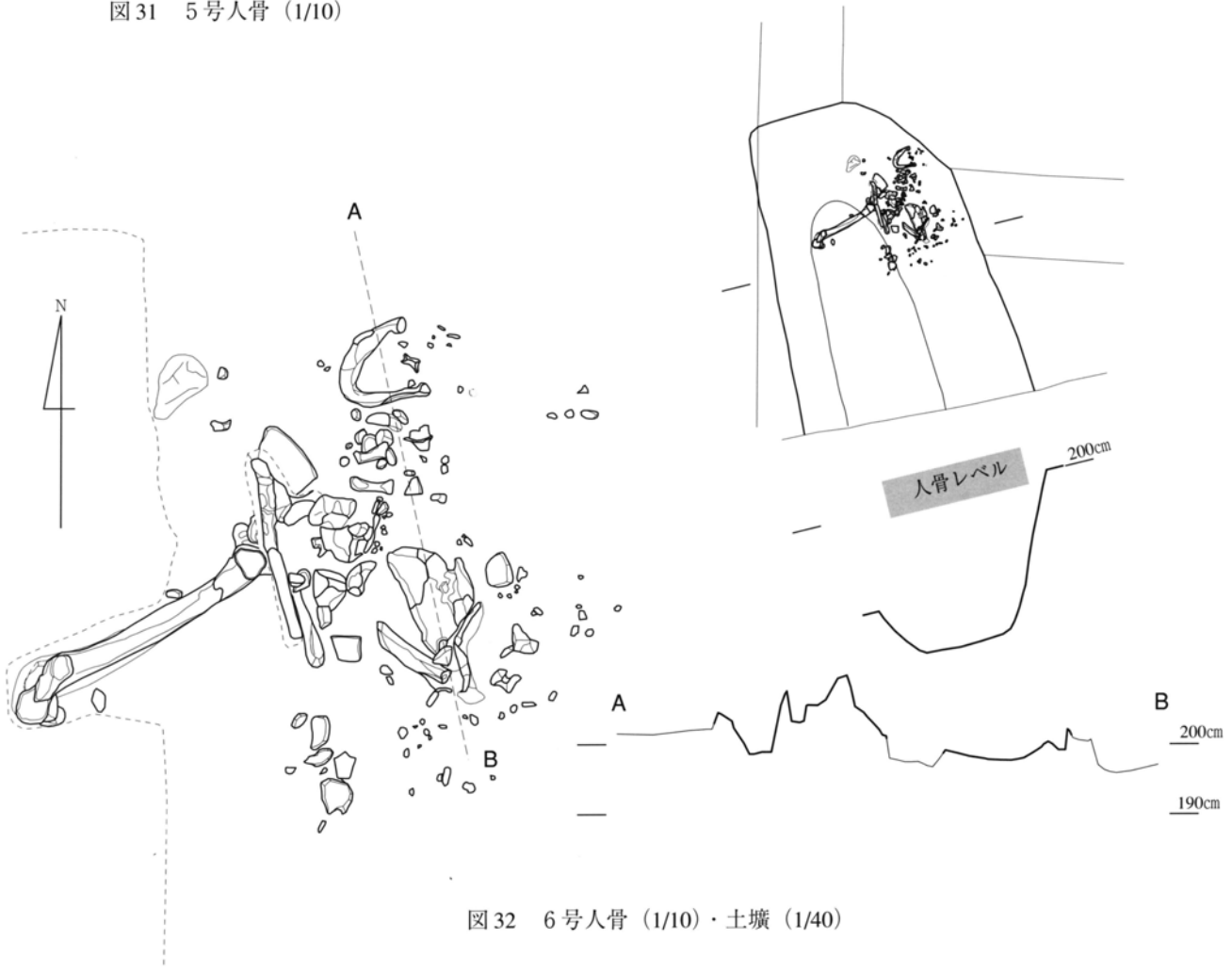


図32 6号人骨 (1/10)・土壙 (1/40)

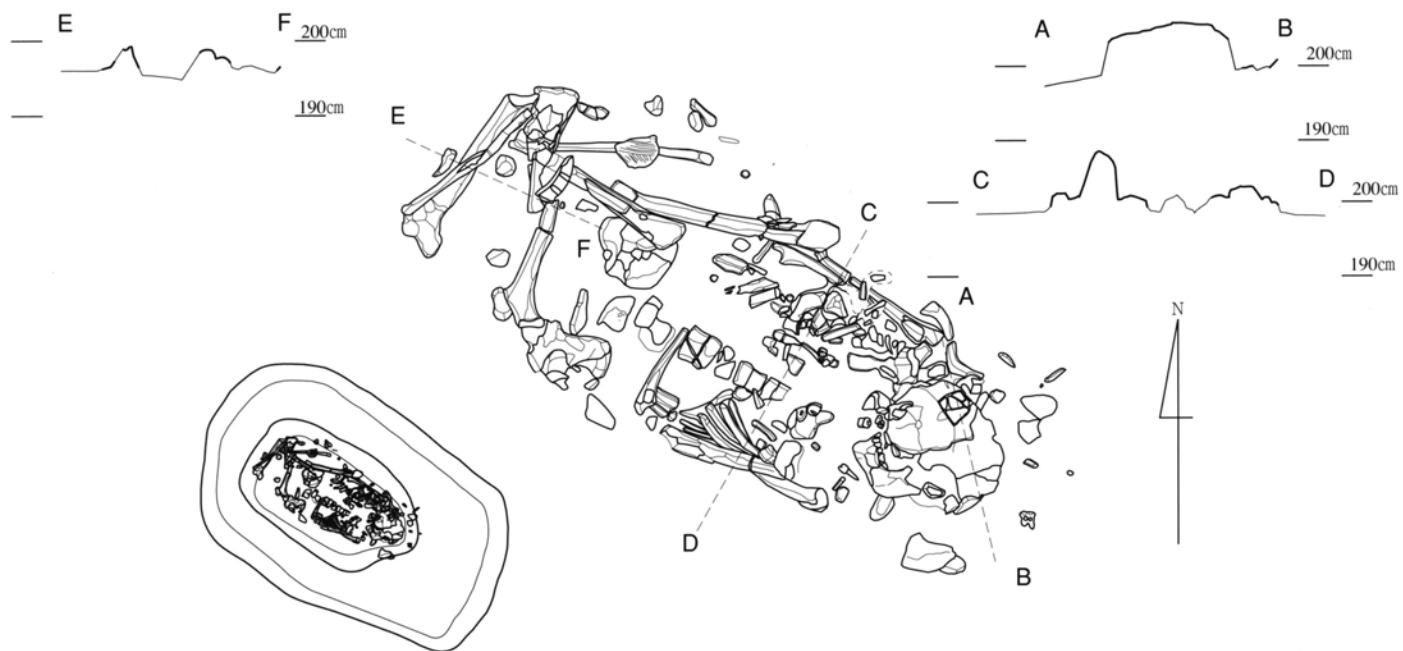


图33 7号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)

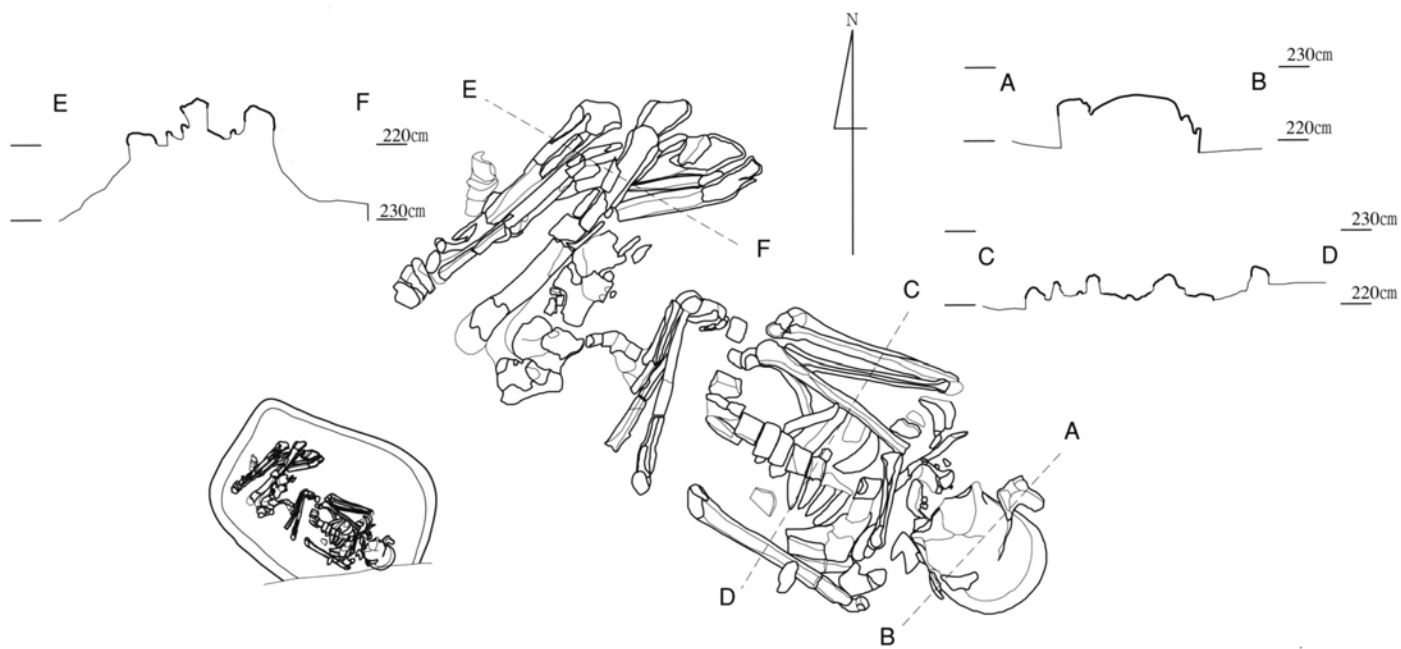


图34 8号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)



图35 9号人骨 (1/10)

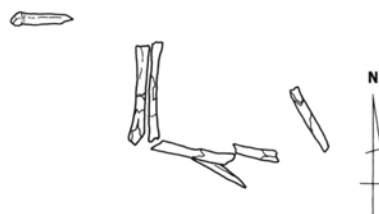


图36 10号人骨 (1/10)

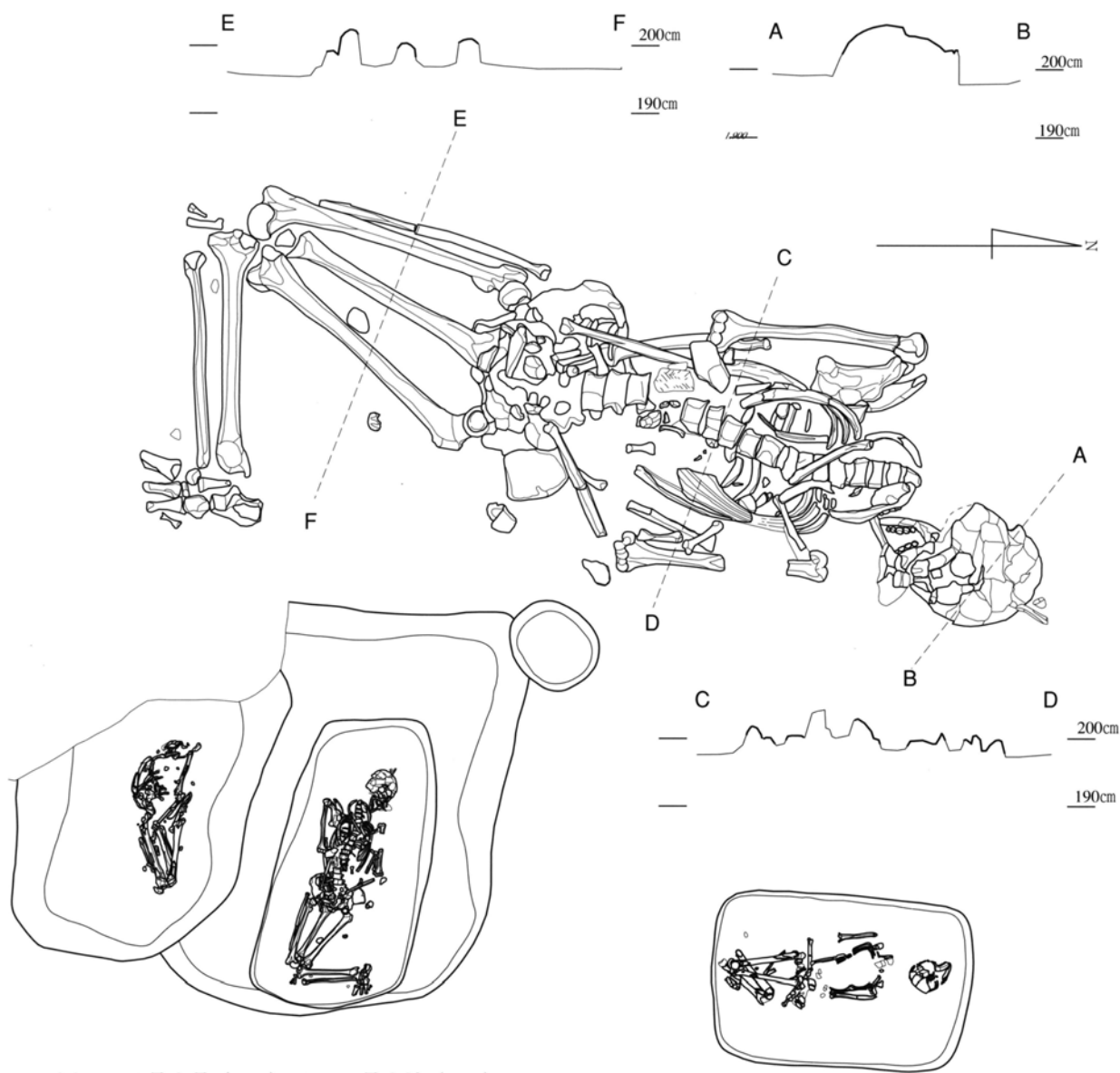


图37 3号人骨 (1/10) · 3·4号土坑 (1/40)

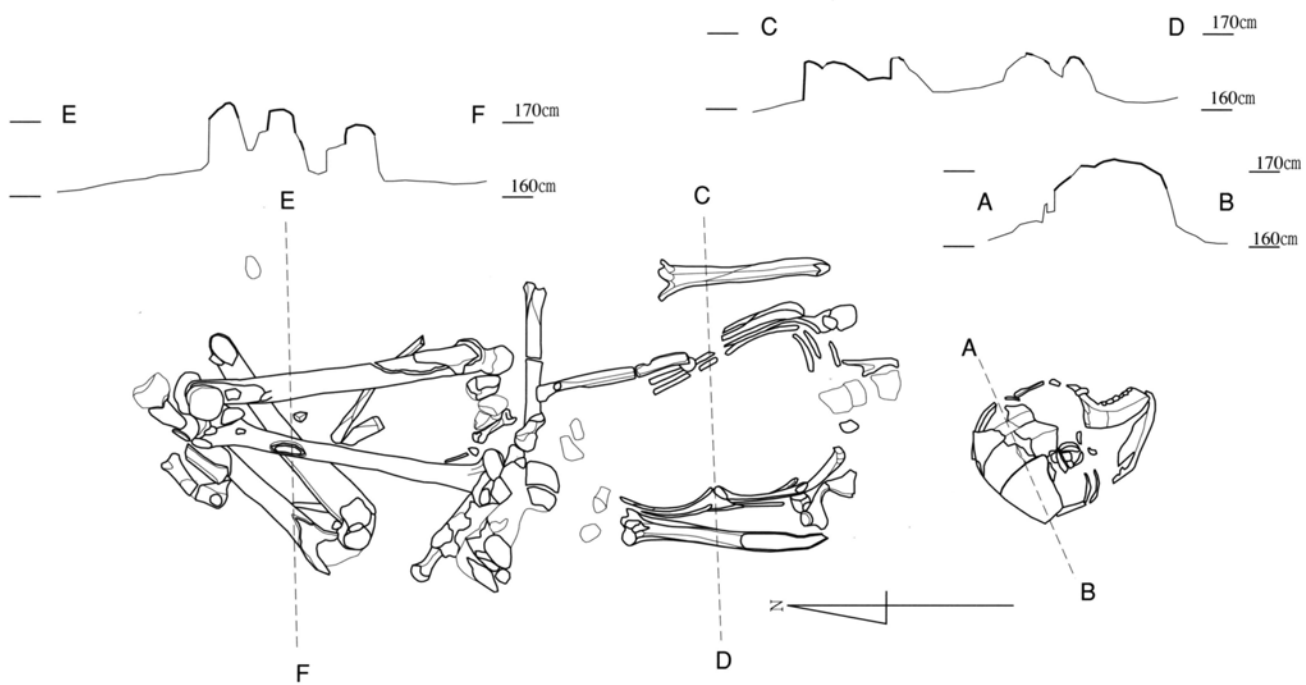


图38 12号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)

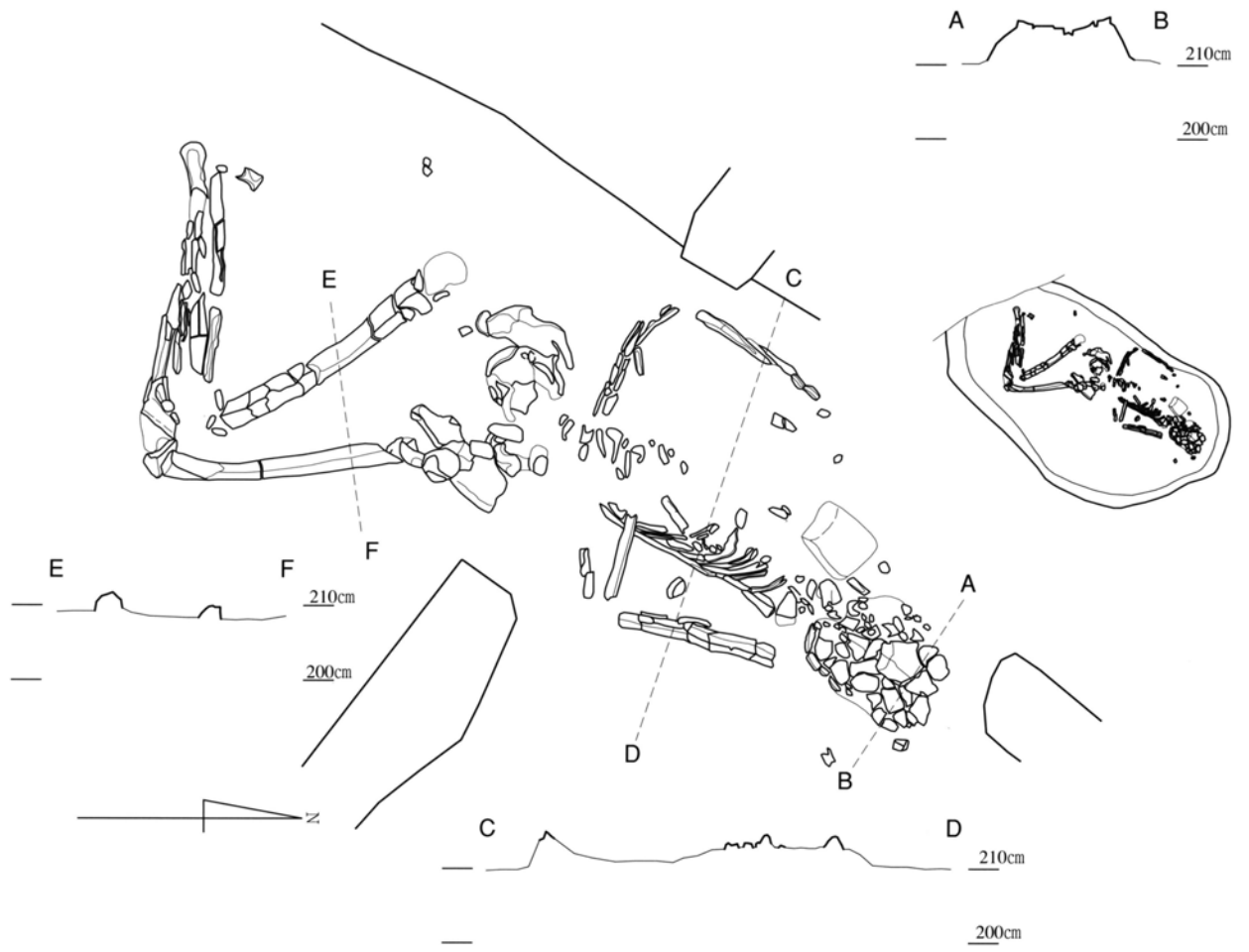


图 39 13号人骨 (1/10) · 土壙 (1/40)

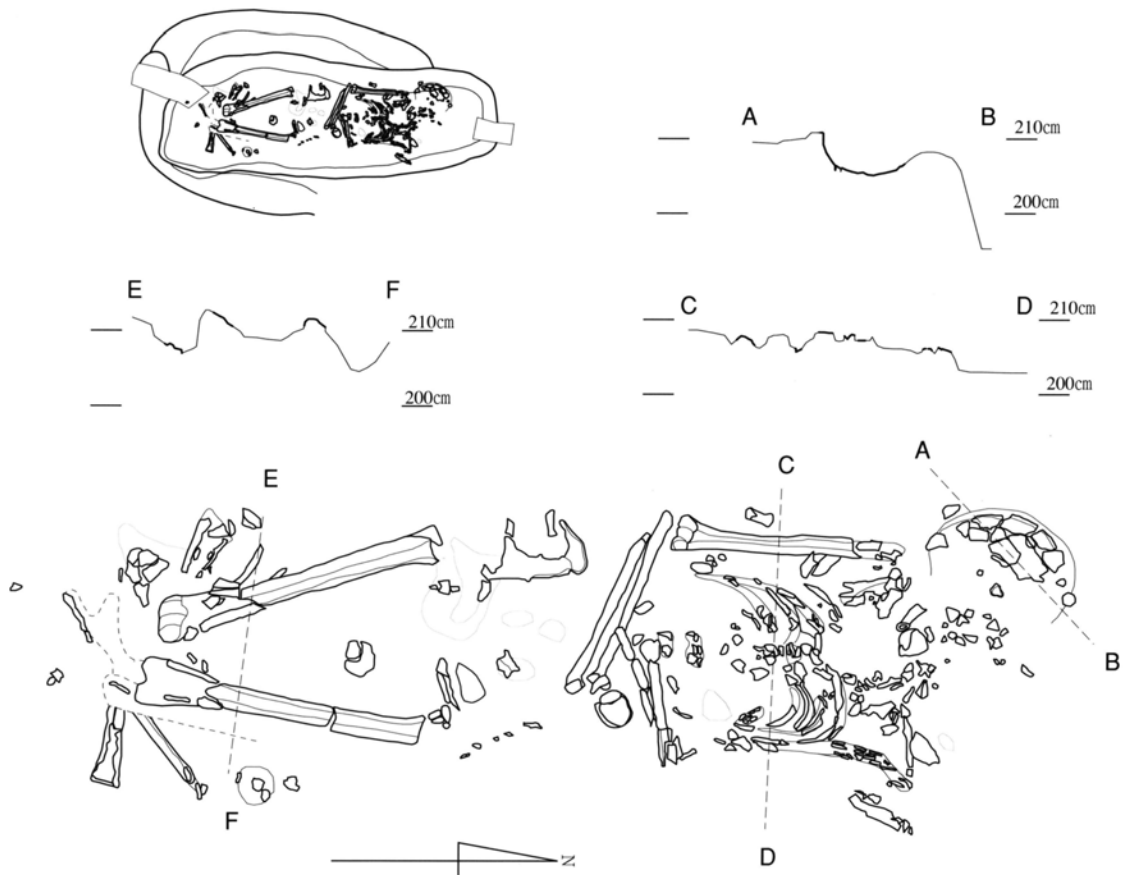


图 40 14号人骨 (1/10) · 土壙 (1/40)

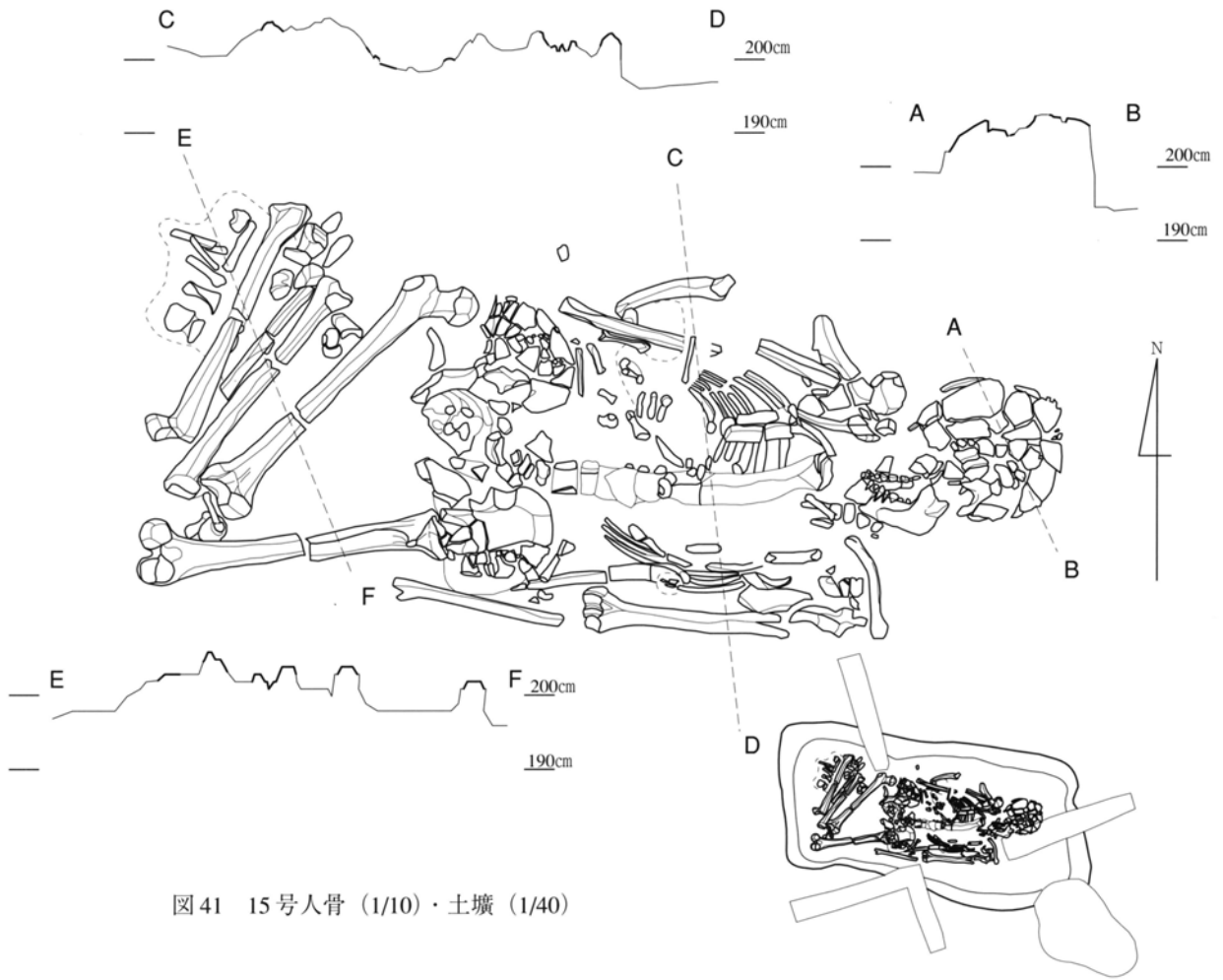


图41 15号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)

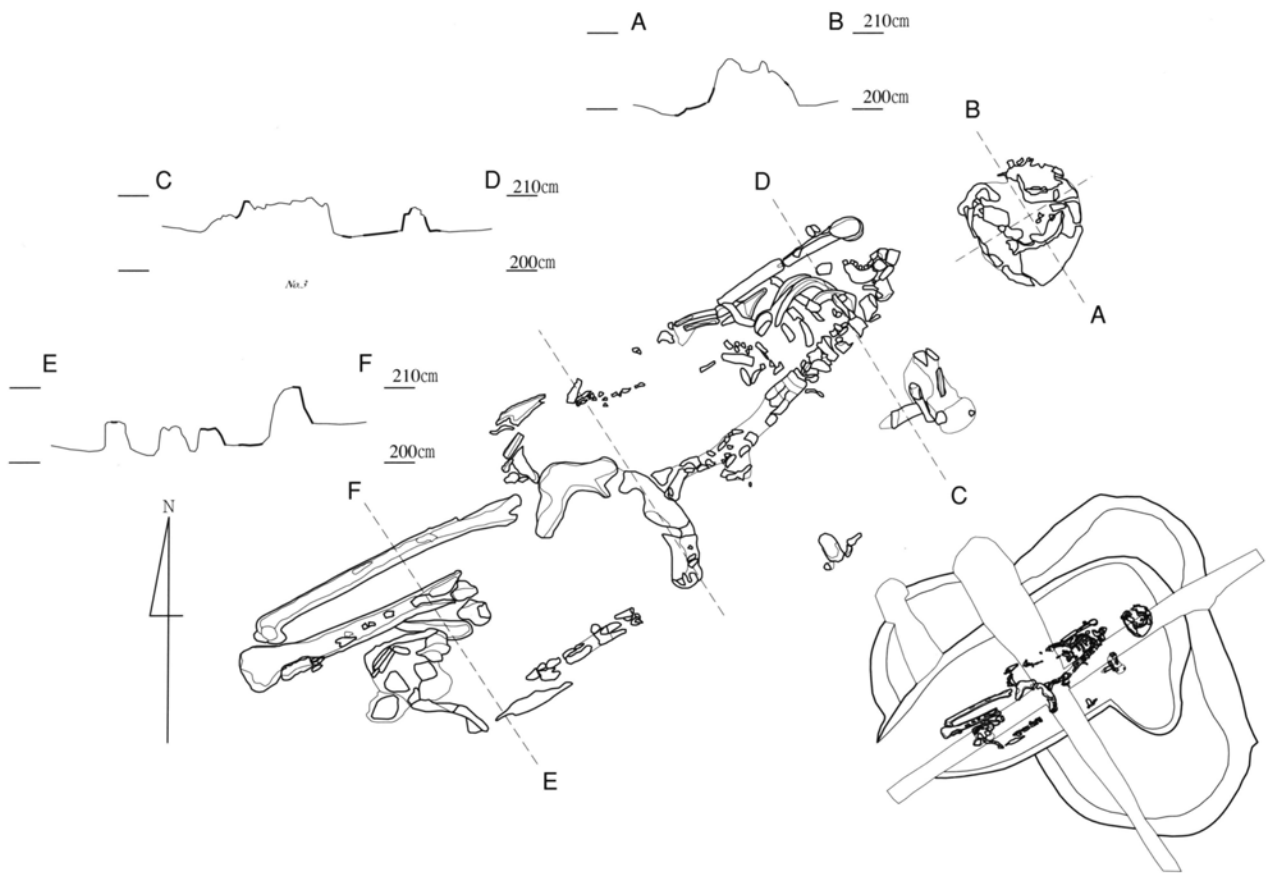


图42 16号人骨 (1/10) · 土坑 (1/40)

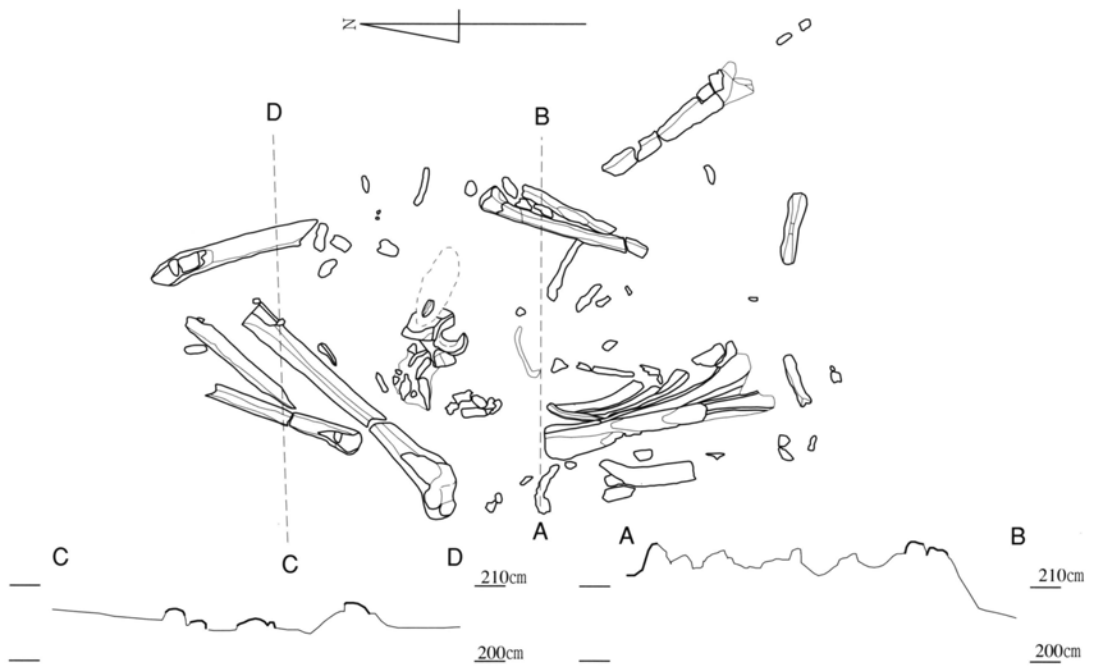


图43 17号人骨 (1/10)

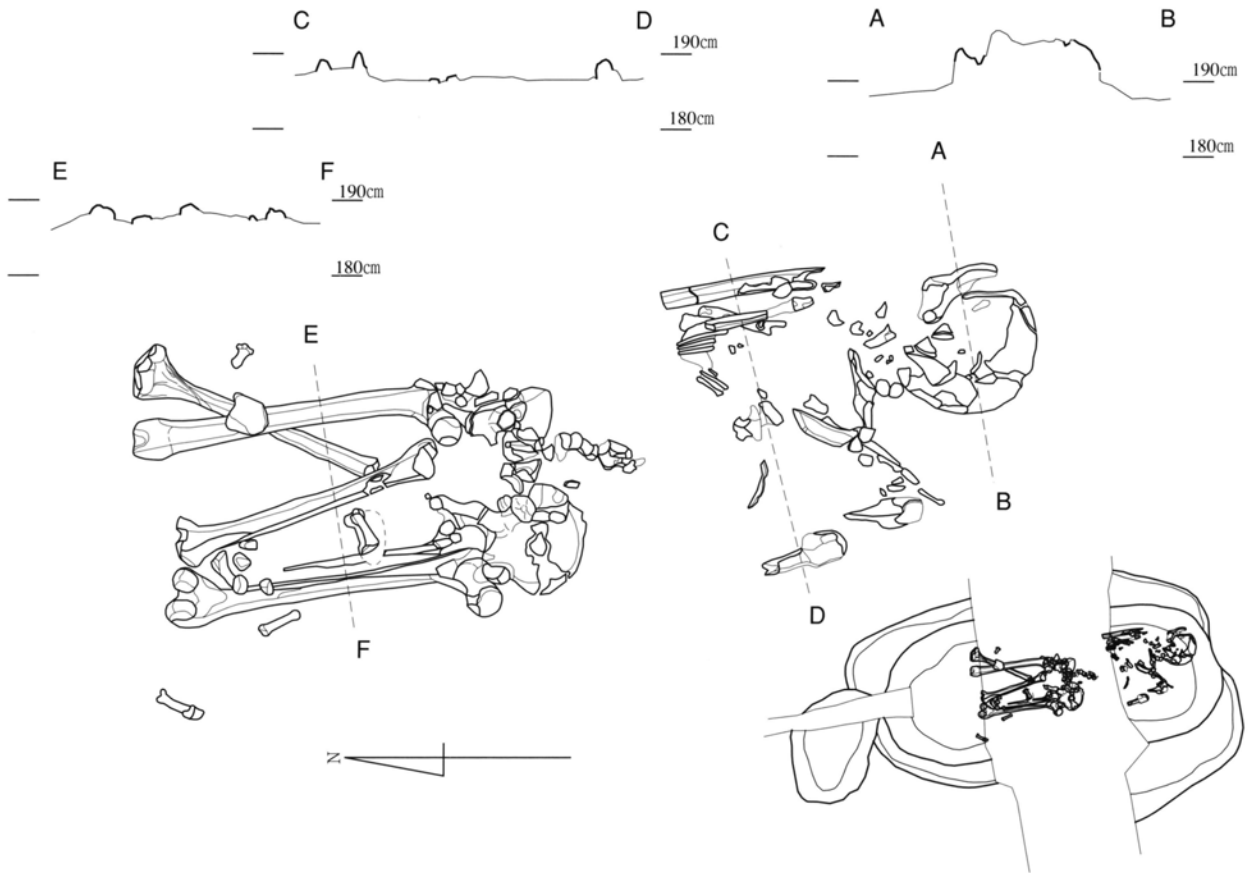


图44 18号人骨 (1/10) · 土壤 (1/40)

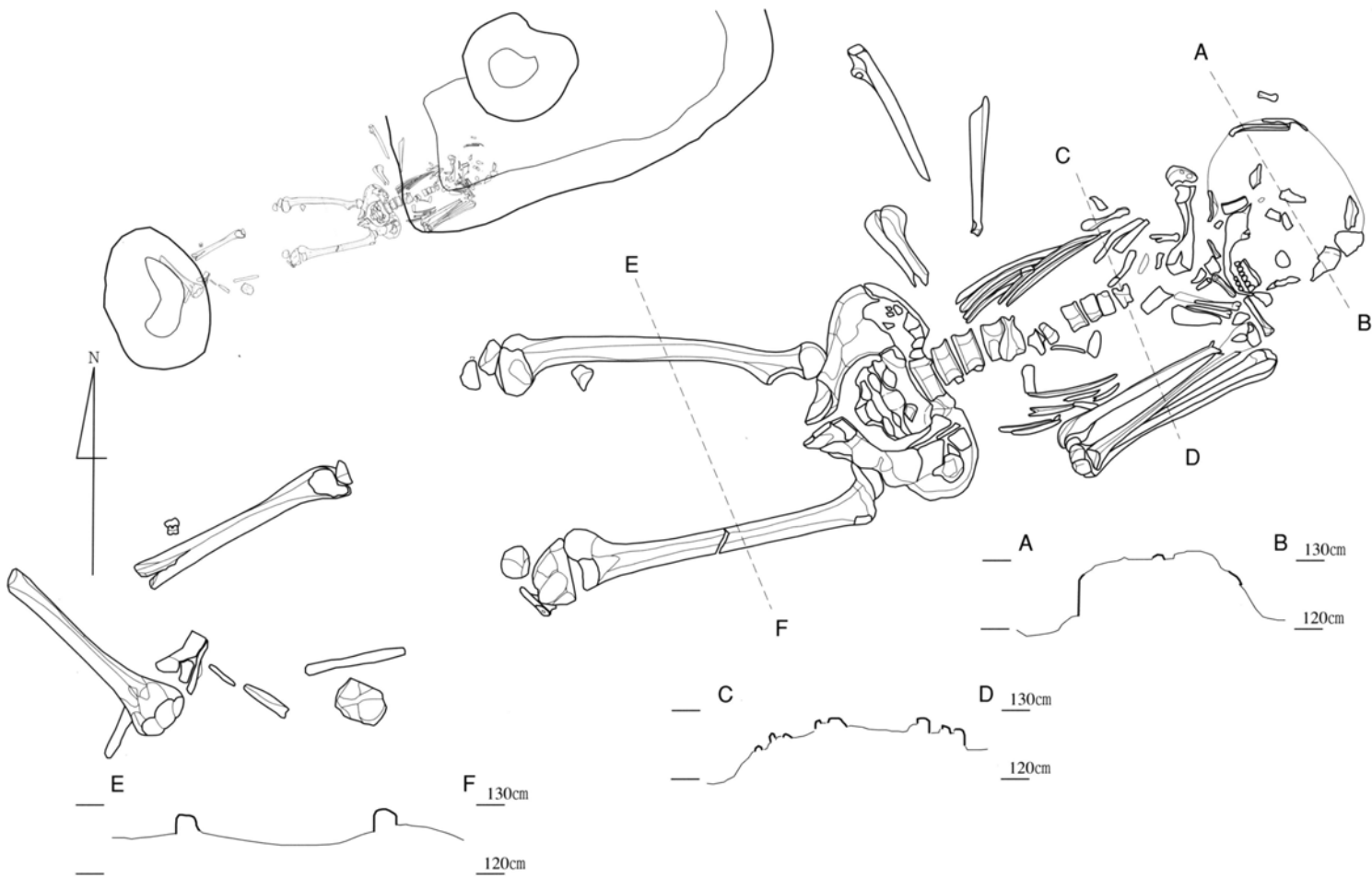


图45 19号人骨 (1/10) · 土壙 (1/40)

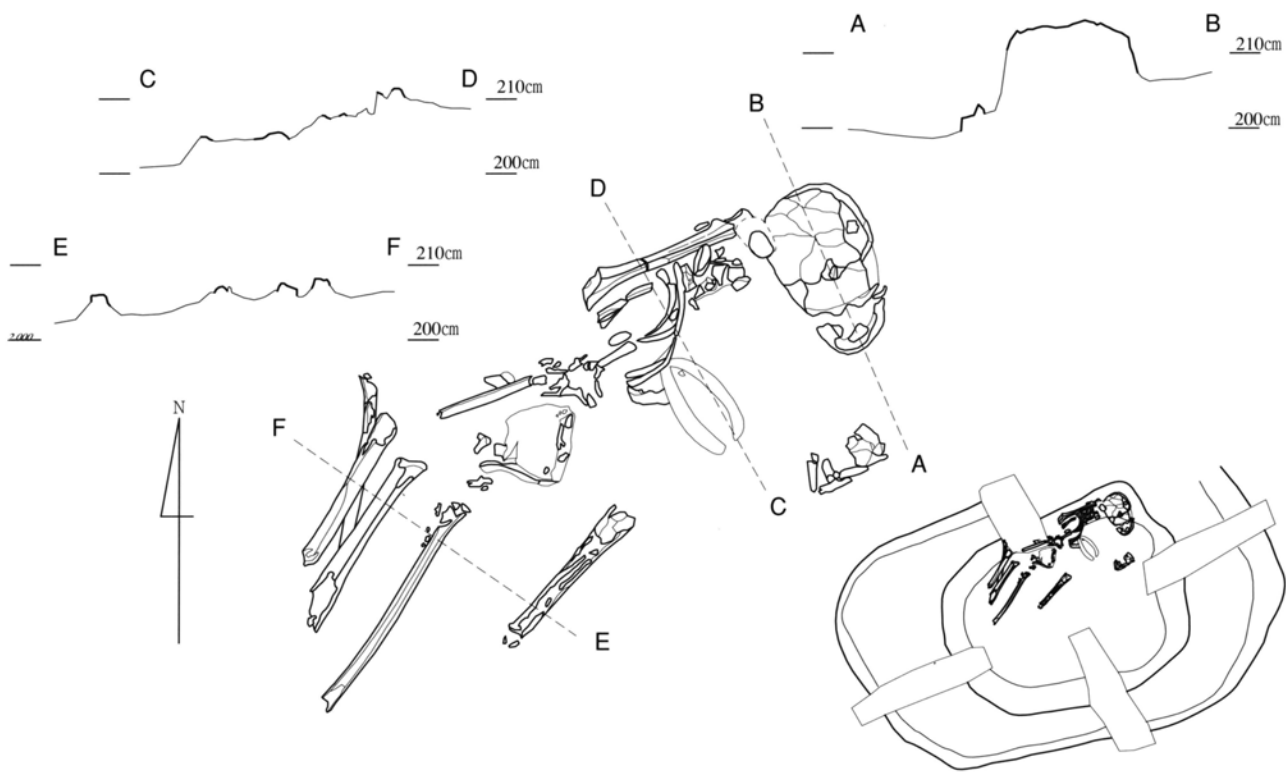


图46 20号人骨 (1/10) · 土壙 (1/40)

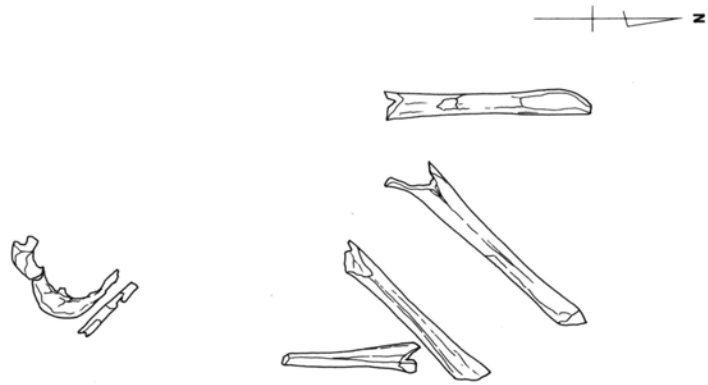


图47 21号人骨 (1/10)

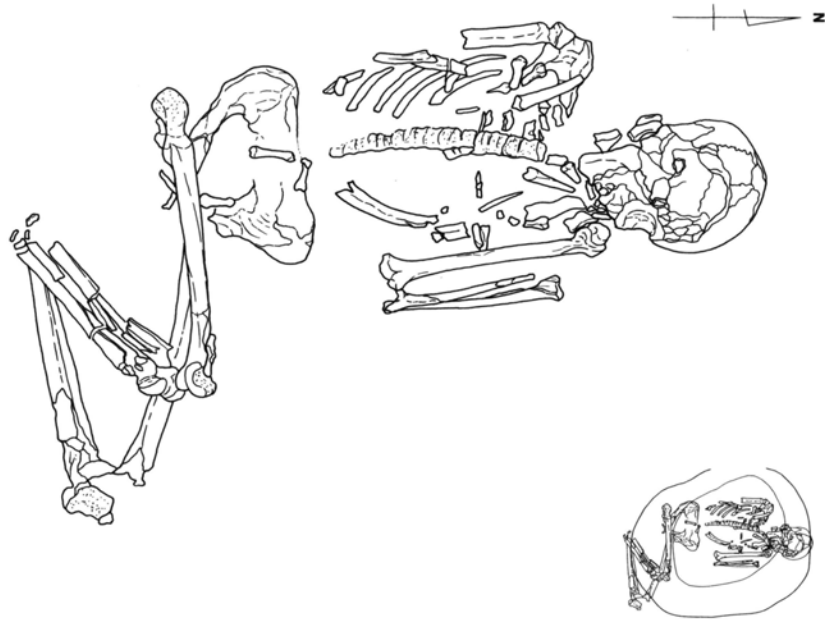
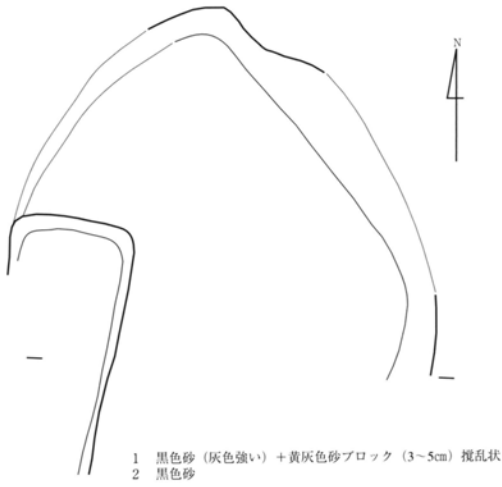


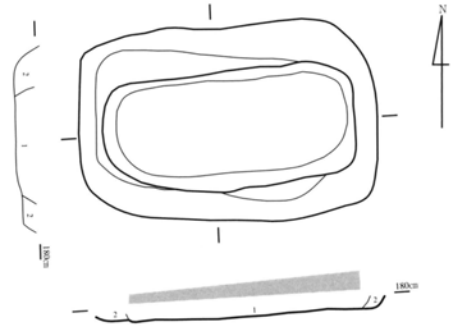
图48 22号人骨 (1/10)



- 1 黒色砂 (灰色強い) + 黄灰色砂ブロック (3~5cm) 攪乱状
- 2 黒色砂

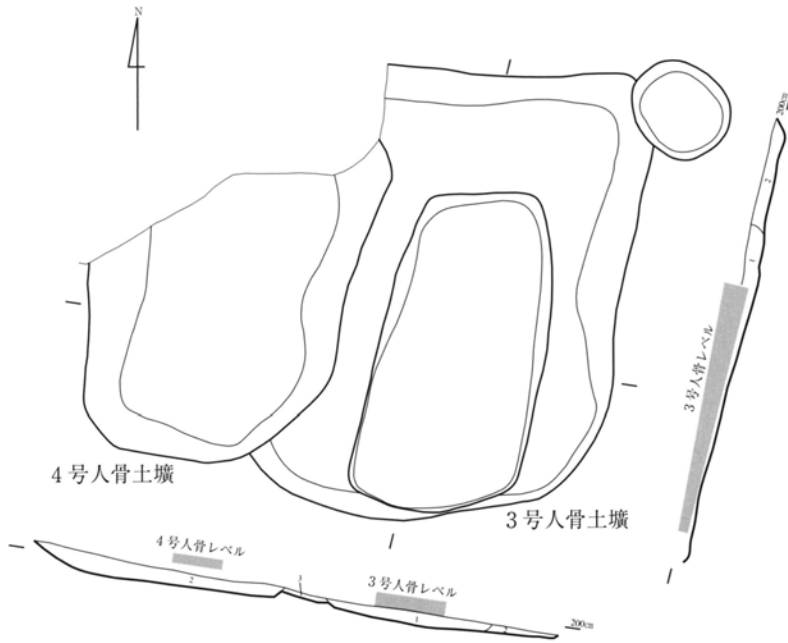


1号人骨土壌



- 1 黒色砂 (やや灰色)
- 2 黒色砂 + 黄灰色砂ブロック (1~5cm) を含む

2号人骨土壌

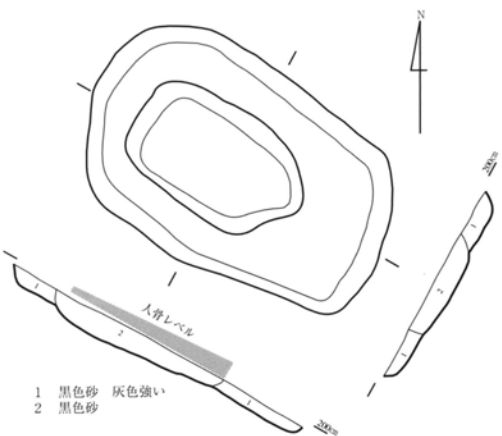


4号人骨土壌

3号人骨土壌

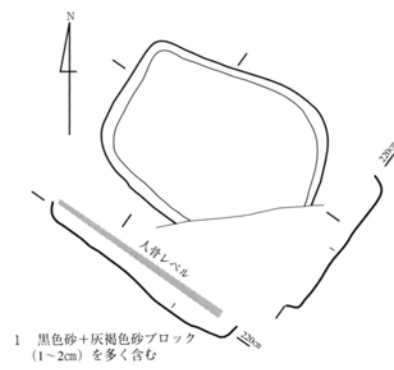
3・4号人骨土壌

- 1 黒色砂 (有機質強い) + 黄灰色ブロック (1cm以下) をわずかに含む
- 2 黒色砂 (やや茶色) + 黄灰色ブロック (5~8cm) を多く含む
- 3 2 黄灰色砂ブロック少ない



- 1 黒色砂 灰色強い
- 2 黒色砂

7号人骨土壌



- 1 黒色砂 + 灰褐色砂ブロック (1~2cm) を多く含む

8号人骨土壌

図49 埋葬人骨土壌 (1) (1/40)

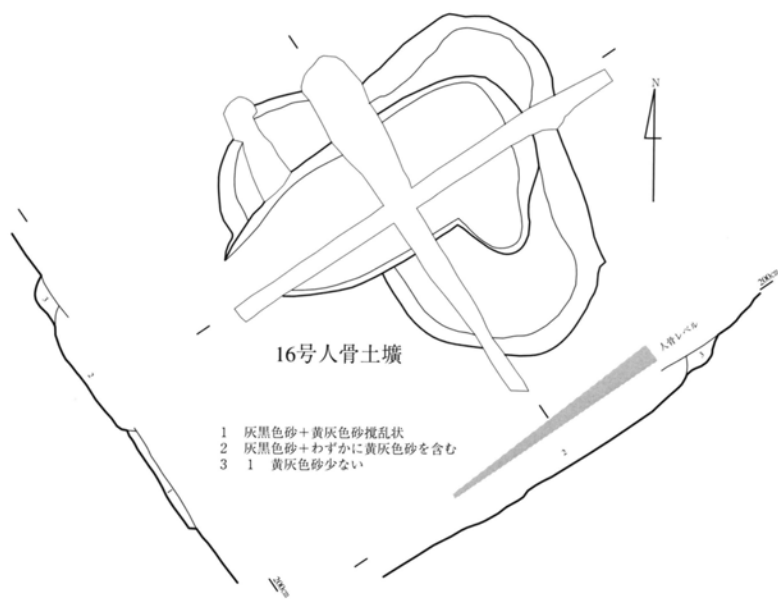
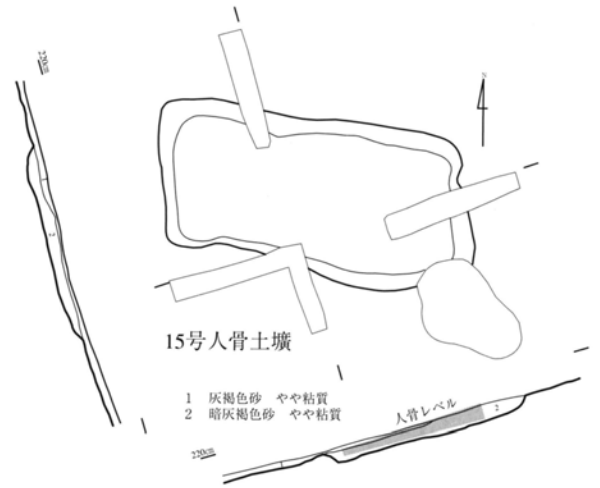
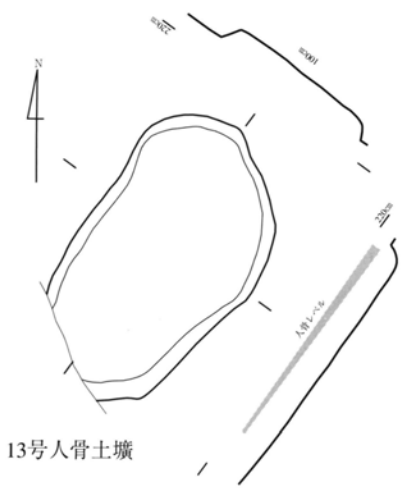
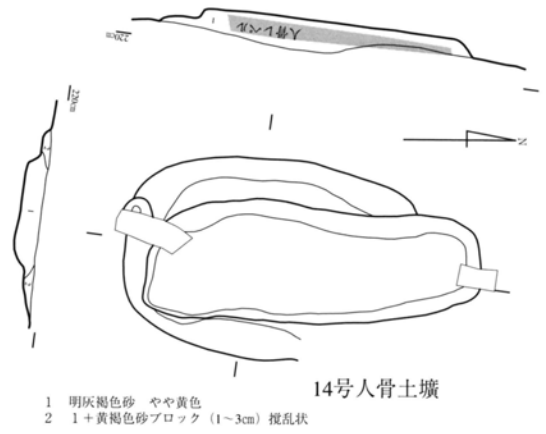
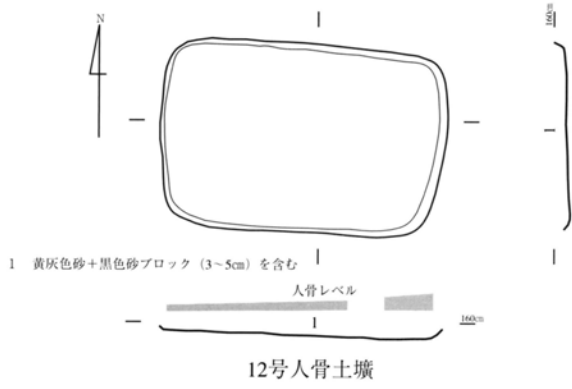
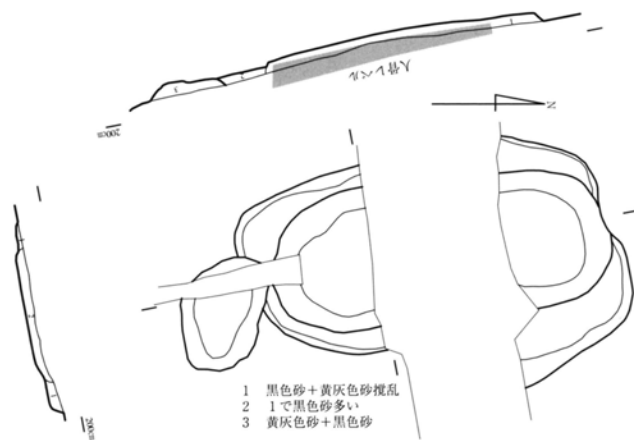
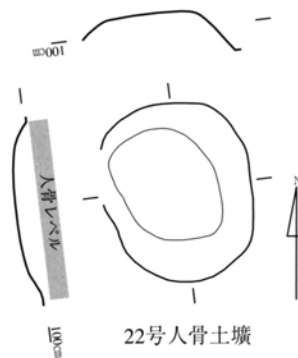


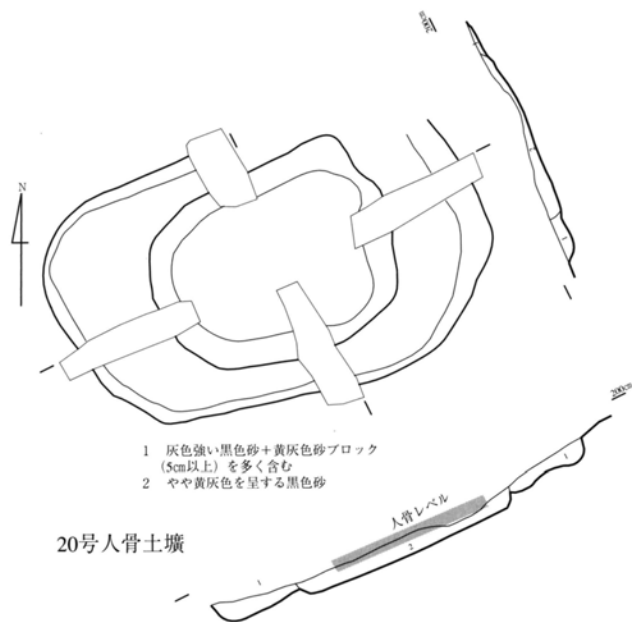
図50 埋葬人骨土壙 (2) (1/40)



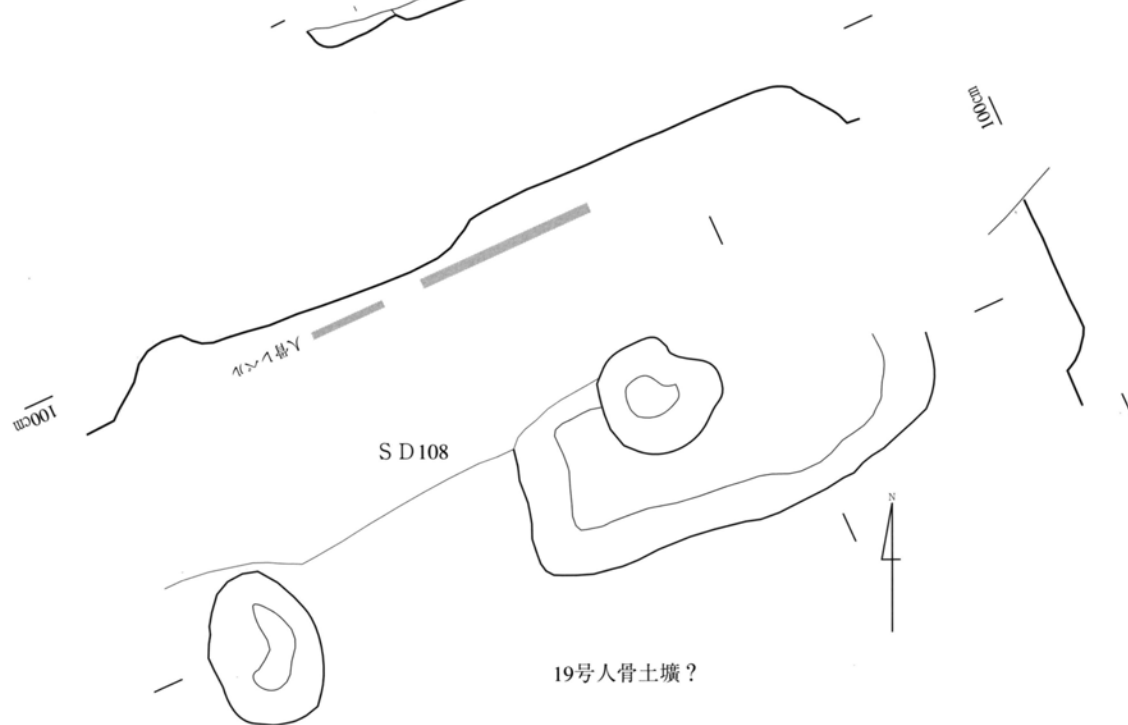
18号人骨土壙



22号人骨土壙



20号人骨土壙



19号人骨土壙?

図51 埋葬人骨土壙 (3) (1/40)